明治二十九年四月二十日發行

女鑑

第百貳號

東京國光社

女鑑第百二號

目錄



ほどく

おもしろの春雨や
花の散らぬほどふれ

とは、むかしいやしき京童の、うたひはやしゝといふなる歌ながら、誠に優なる道理りをこめたりといふべし。もの事すべて、ほど〱なるべきなり、ほど〱とは、むづかしくいはゞ、中庸とかいふべきことにて、よきほどにして、度を過さず、量を越えざることをいふなり。春雨はげに面白し、のどやかにふりたる、野邊の緑りのやう〱色づくけしき、木ずゑの花の露ふくめるばかりの姿など、春雨につけてのあはれは、いと多し。されど、あまりにしたゝかに降り、と降りて、もの音すさまじく、たま〱の花盛りをば、情なくも、うち散しはつるやうになりては、その面白かるべき度をもうち過ぎて、たゞ嫉く、あさましく、くちをしく、かひなきものと成り、ありたきものも、一向にあらずもがなのものとぞ成るなる。それは、た

ゞよきほどを越え、よき量を過ぎ、ほど〳〵の境を失へるが故のみ。春の雨のみにはあらず、ありがたき光りも、草木のしをるゝやうなりては、ありがたからず。やさしき露も、野山を枯らすやうなりては、いかでやさしからむ。風となく、水となく、宇宙の森羅萬象、皆ほど〳〵をすぎては、よきもあしく、うつくしきも醜く、かなしきも嫉くぞなるなるは、あたらしきことにあらずや。

人の上にても然り。中肉中丈をよによしといふも、まことよ高きにすぎ、低きに過ぎ、太きに過ぎ、細きに過ぎたるは、ほど〳〵ならで、醜ければなり。彼の偏屈人も、頑陋なるも、悪人も、病者も、怠惰者も、世に圓滿ならざる人は、殊に身をあやまつ者、家をやぶる者の如きは、皆ほど〳〵を失へる者ならずといふ事なし。もの毎に、ほど〳〵といふ事、よく〳〵心得べきなり。悦びも、ほど〳〵を失ひては、驕慢と成りて、身をあやまつに至れば、嘆きも、ほどをすぎては、愚痴のみ、樂みも程を過でしては淫となり、運動も度に叶はざれば、反りて害を來し、勉强も度に過ぐれば、いたづらに身を損して、社界にも、己にも、何の功にもならず。富貴もあまりては、身を安ずるを得ず。儉約も程を越えなば、吝嗇に陷るぞかし。又人の

中にまじりて、餘りに言の葉の多きも、その人の品格を下し、心をも知られて淺ましう思はるゝものなれど、さらばとて、餘りに口つぼめて、問はるゝにもろく〳〵答へせぬやうなるも、また何の爲の口ぞと思はるゝなり。何事も物はほど〳〵に、事は中庸をとりたらんが、よきなり。

この頃さる所へ行きけるに、大路のほとりに、此方彼方追羽根する女子あり、春の遊びなり、などかは惡しからむ、あな如何にしてかと見るに、羽根うけ損じたる者は、罰として塗らるゝなり。親々の心をいためて、つくりたてたる面ならぬはなきを、しかも、萬につゝましかるべき女子なるを、われとわが面を塗り汚して、うち狂ふ事やある。いつ世の中の敎はゆきとゆきわたるものゝやとなげきつゝ、さる家を訪づれたるに、折りしも近き遠き朋どち呼びつどへて、骨牌あそびするなり。皆さる家の令孃とおぼしく、玉よ、花よ、うつくしからぬはあらじ。久方の光りのどけき、あらし吹くみむろの山などよみたてゝ、とりあらそふさまは、げに、花のちりまがひ紅葉のちり亂るゝばかりなるに、うち興じて見たれば、初めの程は、只勝敗を分くるのみなりしが、かくては面白からずとて、やがて、墨とり出でゝうち負

けたるに塗りかくるなり、忽ちま花の如き面も、皆垠がめのやうになりて、うめき狂ふさま、狂女の畵にも、かゝるはあらじとおぼゆ。さても深窓の少女が。或は中には、昨日も一昨日も、徹夜して、今日は頭いたむなり、妾もそれ故に、風を引きしよなど、頻りに手柄顔なるありけるが、こもまた度を失ひしにはあらずや。元より目出度御代の春なり、日本の民草は千代に八千代にうたひ興ずべく、羽根に、紙鳶に、骨牌に、遊び祝ふべき時なり、遊び興ずべき日なり、遊ぶはよし、興ずるはよし。けにかゝるときには遊ぶがよきなり、よく遊びよく興じよく祝ふべき時なり。されどかくなりては亂なり、狂なり、興にもあらず、樂にもあらぬなり。やがてはど〱を失へるが故なり。心すべき事なりかし。何事もほど〱中庸と云ふ事、忘るべからず。かゝる事は古へより云ひふるせし事、新らしうこと〲しく、云ふべき程ならねど、云ひつゝ行はざるが多く、知りつゝ迷ふが少からず。古の事又更に、云はぬにもあらじとて、思ひあたりたるまゝ、嬢たちにつげまゐらするなり。



至誠の感應

宮地嚴夫

至誠は天地をも動かすものなり。況や人に於てをや。と書出したるは、常に思ひ出るごとに、感餘りて落涙禁めがたき、一首の歌あるによれり。其は彼京極黄門定家卿が、小倉山の山莊の障子の色紙形に書れしより起りたりと云ひ傳へて、普く世にもて囃さるゝ、百人一首の中にも、撰び出されたる歌なれど、誰知らぬものも無れど、先其歌より擧むに、彼右近が讀たる。

忘らるゝ身をは思はずちかひてし
人の命のをしくもあるかな

と云へる歌是なり。抑此右近と云へるは、大和物語などにも、季縄の少將のむすめ右近、きさいの宮にさぶらひける比などもありて、右近少將藤原季縄、また交野少將とも云へる人の女にて、后宮につかへ奉れる人なり。其を右近としも云へる由は、宮中にては、女官に、其父の官名を呼びて、斯く云ふこと、職原抄にも見えたり。又或書には、季縄を季綱に作れり。孰れを正しとすべき歟。斯くて此歌は、同じ大和物語に男のわすれじと萬のことをかけて、ちかひけれど、忘れにける後に、云ひやりけるとの、詞書をそへて出せり。一首の心はいと能く分りたれども、猶これを解むに、忘らるゝ身をぞ思はずとは、即ち詞書の如く、右近には始め二世をかけて契りし男のありて、其男が天地の神かけて、此二人が中に若心の變ることも有らむには、必ず神の冥罰を蒙りて、命も絶なむものぞとちかひしに、其詞にも似ずて、其人早くも心變り、ちか

ひしことすら、忘れ果たるを、右近は、其忘られたる我身をも思はずとて、聊も恨みとはせぬとの事なり。然れど、ちかひてし、人の命の惜くもあるかなと云ひて、始め若心の變りたらむには、命も絶なむこと、誓ひしことの、欺くべくもあらねど、其變りし人は、必ず神罰に依りて、命絶べきを、今となりては、我身の忘られたることなどを、恨み思はん隙やはある。よしや人の心は變り果しにもあれ。我心は露ばかりも、違ふべくもあらねど、唯懷馴しく最愛く思ふ人の、敢無く死ん命こそをしけれと、我身の忘られたる恨をも思はで、かへりて其人の死む命を惜むのみかは、如何にせむ、其人の死ですむべき由もやあると、限り無き餘情を含めて、至誠を讀あらはしたる歌なり。いかにあはれなる一首にあらずや。此右近に二世を契りて、其のちかひに背きたる人は、誰なりしか、今さらに知るべき由無く、又此歌を送られて、如何なしゝか、大和物語には、かへしはえきかずとあれど、それも知るに由無けれど、其人死なでありしならんには、必ず悔ゐ改めて、もとの契りにかへりしなるべし。何を以て斯く云ふぞとならば、此歌後世人をすら、思ひ出るごとに、涙を落さしむるを、斯る歌を送られて、爭でか其心の動かざるべき。若其心の動きたりしとせば、悔ゐ改めて、もとのちぎりに復りしこと、云ふまでも無らん、其は必ず至誠の感應あるべければなり。此より延て思ふに、彼伊勢物語に載せたる、在原業平の妻の事なぞも、亦此至誠の感應の外に非ず。其は業平の妻、其夫の河内國なる、或所の女のもとに、行き通ひけるを、大方の女ならば、嫉み怒り恨み悲みて、あらぬ事をしも、爲出べければ、此妻聊もさる心を持ず。顏色極めて和らかに、止めんともせぬのみかは、殊更に快よく出しやる事、いつも變ること無りければ、業平かへりて心に訝かり、我が河内の女のもとへ通ふとは、か

ねてより知ることとなるに、一言だにも、其を咎むることなく、我出行を甚嬉しげにもてなすは、若や他し男にても設けしには、あらざるかとの疑ひを起し、或日月明かなる夕つかたより、例の如く河内へ行とて、家を立出、道より歸り來て、前栽の中に身を潜めて、妻の樣子を窺ひける。斯くとも知らぬ妻は、いと快よく業平を出しやり、後にて己れは花やかに化粧し、やがて琴を持ち出で、爪音高やかに、搔鳴らし、

風吹ば沖つしら浪立田山
　夜半にや君がひとりこゆらん

と、聲美はしく歌ひ出ぬ。此歌の心は、我夫の今宵も越て、河内に通はせ給ふ道には、立田山と云ふ山あるに、其山には、此頃動もすれば、白浪とは、唐國の故事にて、盜賊を云ふなるを、其盜賊が出て、人を惱ますとの事なるに、わが夫は、其恐しき立田山を、夜半にやひとり越らんこと、夜深くも獨り越て、行給ふことの、心もとなく、氣遣はしさよと、業平の我を餘所にしたるをも、惡しとも思はで、却りて然る危き山を越給ふを心配するとの、至誠を讀出たる歌なり。斯る至誠の歌をきゝて、業平も爭でか心の動かざるべき。我にもあらで前栽の中より飛出で、淚を流して妻に向ひ、此までの行ひの過れるをわびて、其後は河内へ行く事を思ひ止まりたりとぞ。此も前の右近が歌の心に異らざる話にして、所謂至誠の感應と云ふべきにあらずや。然れども、此は皆古の物語なり。爰に今一つ近き頃にも、此に甚能く似たる物語あれど、因に爰に引出すべし。其は明治八年八月の事とか。岩代國會津郡檜枝坂と云へる所に、農家にて、馬之助と呼べる者のありけり。此もの隣村より妻を迎へけるが、其女は名を喜和と呼びて、甚美しきと聞て娶りたるに、容顏思はしからざれど、いと快からず思へど、然り迚婚儀までも調ひし上なれど、今更に謂れも無く、不緣とも云ひ出

されず、又容顔こそ美しからね、家事をも能く勤め、父母にも能く仕へけれど、先其儘にぞ指れきける。然れど夫は心に嫌らぬ所のあるより常に之を悒せく思ふのみかは、遂には他女に通ひて、家にある事だに稀なる程なれども、妻は毫も之を恨ず、悋氣嫉妬など云ふ事更に無くして、甚まめ〳〵しく家事に心を委ねて、勤め勵むことの却りて怪まるゝ程の事なりしとぞ。然るに或時夫は例の如く、夜遊びに出行き、八聲の鷄の告る頃、我家路に歸り來りけるに、不思議にも、裏口の戸の開きあるを見て、さてこそ怪しき事なれ、此には何か仔細のあらんと、直にも内に入り敢ずて、傍にイみ窺ひ居る内に、誰やらん人の出行にぞ、夫は忽ち氣を廻して、此は我留守を幸ひに、間夫を引入れたるならめ。扨は我斯く他女に通ひて、更に内を顧みぬすら、少かも妬む狀の見えざりしは、留守にて斯る不埒をなしをれなるらん。然れど、今出行は、必ず其間夫の歸るにこそあらめ。いでや之を捕へて、糺さでやあると、其跡追懸て何者ぞと咎むれど、いとやさしき聲にて、ハイ喜和でござりますと云ふに、驚き、何故夜中に出行やと問れて、其妻答ふるは、此頃の殘暑にて、晝の中は暑さ堪難き故、未明に起て、肥料を畑へ運び、晝は御前と緩ゆる休まむと思ひてこそ。此夜深には出たるなれとの事なるにぞ、夫も是を聞て、倏々家業を大事と、斯く迄働くものを疎み、餘所心ありしは、此上も無き我過ちなり。今よりは再び斯る心は持まじきぞと、深く前非を後悔して、手を携へて内に歸り、其後は又遊びに出ることなく、夫婦睦まじく相暮して、間も無く子さへ生るゝ事となり、一家繁榮の基を立たるとぞ。此は此明治の御代となりての話なれど、其妻の至誠によりて、夫の過ちを悔改めしめ、夫婦の道を全うしたるは、彼業平の妻の昔語に異なること無し。思ふに此喜和が、晝は御前と緩ゆる休まむと思

ひてこそ、此夜深には出たるなれと云ひし詞は、前の業平の妻の、夜半にや君がひとり越らんと、讀し歌にもさら〳〵劣らぬ至誠のこもれる詞にして、要するに、此二人の妻ともに、彼右近が讀たる、忘らるゝ身をば思はずとの、歌の如く、我身を忘れて、夫を思ふ、天地に貫きたる、赤き淸き誠の心を持たる人にて、其誠より讀出し、云出したる歌なり詞なるにぞ、業平も馬之助も、其至誠に動かされて、忽ち迷ひの夢を覺し、斯くしも本心には復ることを得たるならん。然れば凡人の妻たらんものは、常に此二人の妻の如く、よしや其夫に、過ちあるを知るとも、嫉妬を起し、醜き喧嘩などすること無く、彌其身を愼み、我至誠を盡して、徐ろに其悔悟の心の起るを待べし。斯くせば世に耻をさらすが如きことなくして、事故無くをさまるのみかは、此二人の妻の如く、後世までも人の龜鑑と仰がるべし。之に反て、世に嫉妬ばかり恐ろしきものはあらず。これによりて、國家を亂し、身を失ひ、家を亡ばすもの、古より其例し數ふるに遑あらず。世に困難の數多かれども、嫉妬より起る困難に勝れる困難あること無し。實に愼むべきは、嫉妬なり。而して其嫉妬を愼まむには、此二人の妻などを、龜鑑とするの外無く、扨この二人の妻を、龜鑑とせんには、己れ至誠となるの外無し。己れ至誠とならば、天地をも動かすに足れり、況や人をや。故に獨り夫に仕へて貞女たるのみならず、其至誠を以て、君に仕ふれば忠となり、親に仕ふれば孝となり、兄弟朋友に交はれば、信となり、悌となる、是を以て忠臣、孝子。貞女、義僕など、其對する所に依て、種々に名づくると雖も、其實は至誠を盡したるものゝ名に外ならず、至誠豈盡さゞる可けんや、至誠ならば感應せざる無し。至誠豈盡さゞる可けんや。

（完）

女子教育一班（十一）

三輪田眞佐子

大學に曰く、大學の道は明德を明にし、民を新にし、至善に止るにありと、蓋、今日とて、德育の目的は、至善に達せんためなるべし。おのれは便宜上、女子の行ふべき道德を、第一、已に就ての本分、第二、人に對する責任となして述べん。

第一、已に就ての本分の主なるもの、其一綿密、そも〳〵女子は内事を治むべきを以て、執るべき務は綿密ならでは、終をよくすること難からん。其二儉約、こは一家隆盛に至る基なり。もしこの德なきときは、良人如何に達才ならんも、主婦自らいかばかり勤勉ならんも、日ならず家運衰ふるに至らん。其三忍耐、この德は事業を果さんには、男女共に必要なるべけれど、わきて女子は。その天職を全うするには、必ずこれなくは能はじ、其四秩序、おもふに、秩序を正さゞる女子は、一家を整理すること能はざるべし。大方の家邂逅客人あり。あるは家族旅立などするとき混雜を生ずるものは、つね〳〵秩序を有つ習慣なき報なるべし。其五恭敬、さて敬とはあながちに他人に對して盡す德には限らず、恒に身は攝し、心を放たざるをいふなり。さればにや、古人はこれを主一無適の意と註せり。誠に斯る德なき女子は、決して一日も枕を高うする能はざるべし。其六勤勉、おのれはこれを以て一種の德とするなり。如何となれば、怠慢を不德とすればなり。司馬温公も斯く思ひけん、これを以て婦人六德の一に加へけり。

以上の如き德は、獨り愼みて守るべきものなり。人の已を知ると、知らざるとに、拘はるべきものかは。深山の花は誰もてはやさずとも怨みず、怠らず、天眞を守りて咲き匂ふなり。豈に人たるもの無情の草木に劣るべけんや。人の天地間に生を享くるや、既に職分

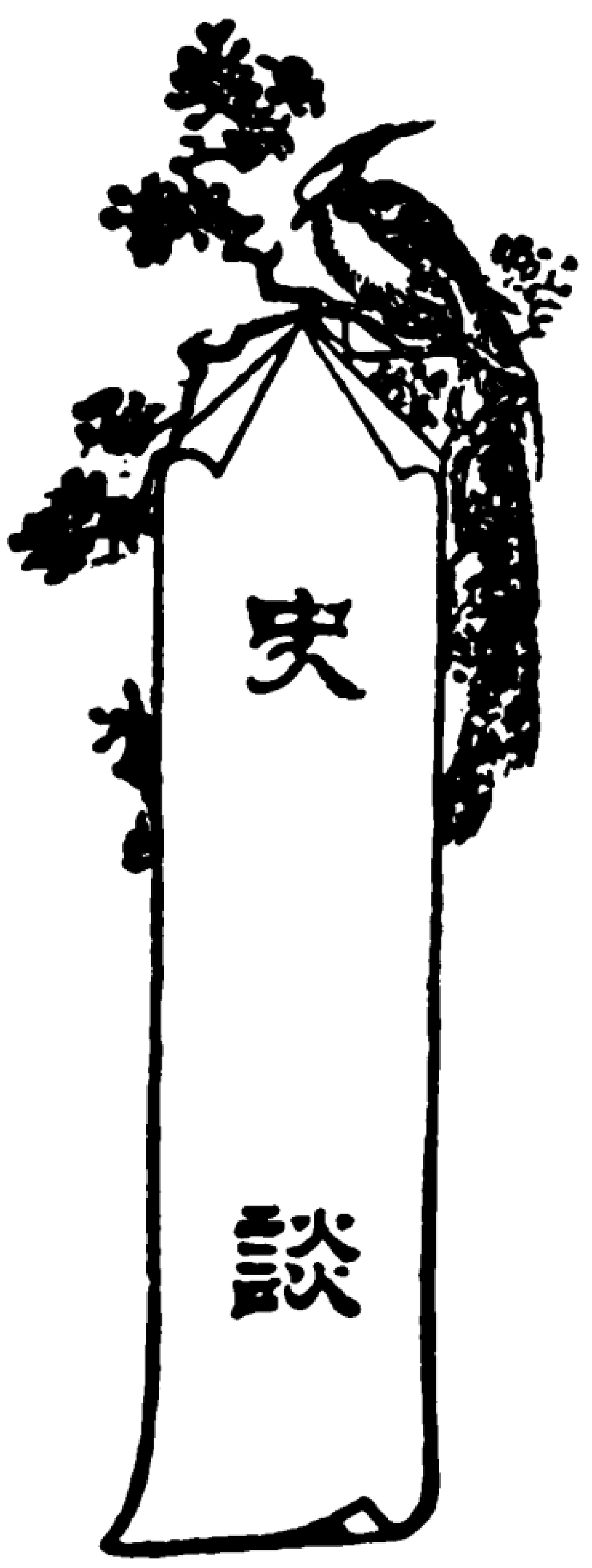
定りぬ。いかでかこれを棄つべき。むかし儀同三司、藤原伊周の母なる高内侍は、磨のこりの墨、剪すてたる紙片などを以て、龍宮の珍寶よりも大切なりといひけり。とかや。實に女子はかゝるめでたき心ころもたまほしけれ。今日は徳行を以て、虚飾をなすに利用するものなり。呼。

第二、人に對する責任、其一貞操、こは女子に最も尊ぶべき徳なり。刹那たりとも貞操を忘れんか。眞正の女と言ふべからず。其二柔順、元來柔順は善惡の差別もなくて、唯々諾々する意味にはあらず。尊長に事ふる道をいふなり。すなはち父母あるは良人の命に服する如きものなり。第三慈悲、おもふに女子は人間恩愛の源なれど、子弟は母の愛によりて育ち、婢僕は主婦の恩を蒙りて勤むる如く、社交のこと一として、女子の慈悲を待たずして、調和するものなし。第四寛大、世の中のことは、道理のみ行はるゝものに限らず。まゝ感情に制せらるゝなり。故に事情を察して、寛大に處置せずむ、殺伐の風のみ盛ならむ。第五公平、女子は男子と異なり、直接に人情を參酌して、人々相互の關係を有つものなれど、公平の徳を養ふべきなり。然るに實際を見るに、女子は多く他人の美を喜ばず。徒ら猜忌心を起すあり。あるは多言もて事を誤り、輕信もて災を招ぎあるは陰險の行をなし、離間の策を施し、口に蜜あり、腹に劍あり、と恐れらるゝは恒なり。天果して靈あらむ如何とか思すらん。

されど、もし女子の徳育、宜しきを得て、上述の如き徳を養ひ得んか、そのときころ期せずして、親は慈に、子は孝に、夫婦相和し、朋友相信し、兄弟相睦しくなりぬべけれ。これより一家治まり、一郷靜に、遂に四海平かならん。あはれ人生の幸福。邦家の隆盛、こよなかるべし。

要するに、道徳にも積極と消極との二種あり。積極

道徳とは、進みて慈善などをなすをいふなり。消極道徳とは、巳の私欲を制するごとく、悪事をなさゞるをいふなり。勿論進みて善をなし、退きて悪をなさゞるは、両つながら必要なれど、女子修徳の順序は、先つ巳を正し、然るのち乗に及すを良とするなり。元來東洋の道徳は、消極に止り、西洋の道徳は積極に流るる傾きありとかや。諸嬢偏する勿れ。黨する勿れ。唯女子たる天分に従ひて、道徳を修めば足らんかし。



酒井忠直の夫人

塩井ふく子

人の禽獣と異なる所以のものは、言語身體の異なるのみにはあらず、家を造りて居り、衣をつくりてまとふのみにもあらず、心よく人倫の道をそなへ、行よく五倫の道をふめばなり。かくてこそ、はじめて人とよばれ、禽獣とは異なるなれ、たとひ高樓金屋に居て、錦衣錦繍をまとふとも、内仁義の心なく、外五倫の道を行はずんば、ねぐらを争ひ、食をむさぼる禽獣と何ぞことならむや。さる事を今更にくだ〳〵しくいふまでもなけれど、黒雲やゝもすれば青空を覆ふ。人また迷ひの雲なき能はず。心に道理を解し、言に仁義を唱ふるも、身は獣行をなすものいと多かり。かゝる人、酒井夫人の我子より推して、奴僕禽獣に至るまでに、ほどこせし仁心のほどを見ば、まさに慙死すべくや。

酒井忠直の夫人は、松平定頼公の女なり。忠直子女数多あり。夫人の生みたるは、二子のみ。長は忠隆、次忠相、餘は皆側室の生みし所なれども、夫人は、巳れが生みの子に異ならず、めぐみいつくしみければ、子女さばかり多かりしかど、恨む者、怒るもの、そねむ

れの、爭ふもの、などは、一人もあらず、反りて夫人が仁愛なる心にならひて、子女等、かたみに、むつみしたしみ、婢妾等も、恩にふくして、よろこびぬはなく、一門の內、常に雍々如として、風波など絕えて起らざりけり。

忠隆幼にして痘を患ひぬ、此時夫人未だ痘を患ひたることあらざれど、夫忠直、母氏養仙院、皆其傳染せむことを憂ひて、忠隆の病牀によるを許さゞるほどに、夫人はいとゞかなしさに堪へず、傅姆に請はしめて云ふやう、母君の仰せ、夫君の御志、自らを深く思召ての御事と、誠に並々とは覺え侍らず、うれしさは身にあまり侍りぬ。併はあれ、人の母となりて、其子の疾病を視ざるは、人情の忍びぬ處になむ。母君がわが身を惜しみ給ふも、妾がまた忠隆をかなしむも、誠に母君よりゆづらせたまひし、人の親の同じこゝろになむ。願くは母君、妾をめで給ふ御心に、妾がまた子をおもふ心をくみ給ひて、あはれ忠隆の病牀によらしめ給へ、妾はよしや傳染して痘を發し候とも、子を見ざる今の心には誠にまさりてなん。返す〴〵も願ひまゐらす。あはれゆるさせ給ひてよと、ひたすらになげき聞えしに、母なる人も其心に感じて、心のまゝにせよと許るし給ひぬ。夫人は大によろこびて、朝な、夕なに、病床をおとづれ、痘色のいよ〳〵紅潤になり行くを見て、ます〳〵いとはず、かなしみて、傍をも去らで、心を盡くして看護なしたりきといふ。げに、ゆかしともゆかし親の心や。

凡そ三千世界に、子を思はぬ人はなけれども、事にのぞみては迷ふ。酒井夫人の誠心のごときは、多くその類を見ず。夫人は獨に、我子のみをいつくしむにはあらず、また人の子にもやさしかりしなり。夫人牛込にありし時、近隣より火起りて、風烈しく、炎煙邸を覆ひて、さながら瀑泉のみなぎり落るがごとくなるに、人々あわてふためきて、主君をも後にして、魂魄もこころも、身にそはず、唯我さきにと飛び出て、走りさはぎて、命を遁れんとす。さるに夫人はさのみもあわてず、仕女の病にてふしたるものありと聞きて、靜に

左右に命じて、之を扶けさらしめんとせしに、倉卒の際、轎を具する暇あらず、さらばとて、病婦を巨櫃に納れ、被褥を覆はしめ、藥銚を其側に置きて、庭牆に循ひ、走らしめしといふ。まことに辭色閑雅悠然として、驚かざること、男子も及ばざる識量とて、感ぜぬものはなかりしとぞ。己が身を遁るゝだに、危ふかりける火急の場にも、人の身を忘れぬ心、病婦は如何ばかり嬉しかりけん。げに熱涙に、あつき褥の袖をもしぼるばかりなりしもうべや。

また夫人、常に鳥雀を庭にあつめ、之に食を散じ、そのよろこび拾ふを見て、大にこゝろを慰さまれしとぞ。かゝるめでたき人も、天命如何ともすること能はず、遂に元祿の十二年といふに、疾にかゝりて、遂にはかなくなりぬ。かばかりに仁愛ふかき人のことなれば、常にいと賑ひし邸門、今日はゑづみにしづみ、消ゑに消ゑて、人は飲水をも口にせず、草も木もさながら、色なきがごとく、庭前にあつまりし鳥雀もしをれはてゝ飛びもせず、侍女故の如く、食を散ずるも、かなしげに木によりてなき、啄まざること累日、其喪を知りて哀むがごとくなりきとぞ。げに古人のいはゆる、德、禽獸に及べるものか。况して人をや。あはれ、世もかはり、時移りて、世は澆季となり、人は浮薄にながれぬ。子にして親を親ともおもはぬものあれば、親にして、親の親たる道をつくさぬ人もなきにあらずとや。今拙き筆をもて夫人の傳をものするに方り、たゞ涙のみこぼれてなむ。

初鹿野源五郎の妻

山川清素

世には豪の物と歌はれながら、川中島の水烟と消ゑ、武田入道には天晴手のものといとしまれながら、主の馬前にたふれたる初鹿野源五郎、年は二十五の猶餘命あらむいかばかり美花に添ふる實や結ばむとゆかしきに、開けむ散り殘りたる紅一輪、無殘やさそふ嵐にさそはれもせで、其香いよ〳〵かぐはしとはさてもあは

れのきはみにてこそ。

戰國割據の世の習ひとて、道もなく、教もなく、天地たゞ修羅のちまたに、首をちぎり城をはふるをもて、又なき事と心得たる此の頃、是非もなきことゝはいへ、義といふことも貞といふことも、わいためなかりけるこそあさましかりしか。

さるからにかゝる世の勢、鬼をもひしがんずる勇士の、名乘るのみにてだにおのゝくばかりの者おのれ却りて戰場の鬼となりし時など、敵に其の死を知らせまじと、外より入りて其の名をおそひ、殘れる妻あらばそれをもとはじめて貞操を破らするも常の事とおもひて怪まざりけり。

されば敵も味方もあはれ勇者とおぢ怖れたる源五郎の武者振、今は其の名ばかり殘りたる事を信玄流石に痛く口惜がりて、いかにもして然るべきものに其の名、其の姓を名乘らせて死しても惜しき勇者の名を空しくさせじと、同じ緣家の源五郎とは從弟なる彌五郎といへるを初鹿野傳右衛門と名乘らせて源五郎の妻に配せんとしけり。

濁りても泥中の蓮はあるものぞ。冬枯れても晩節の綠は殘れるものぞ。源五郎の妻は生れ出てゝたらちねの母なる人の膝におひたち、人となりて夫の家にかしづきしこのかた。天とゞろき、地くつがへり、世は劍戟の林にとぢられて、矢玉のあらそひ此所も彼所もえいおうの修羅道、五常五倫の道は地を拂ひて獸行狼擧のみはびこれる中にも生れながらに曉り、心ながらに覺えたる、自然の操行、親を放れて身を置く所は良人の側、世を辭して落付く所は同穴の奥城といつしか心の底に深く刻みて、いつがな心を飜へさずたとひ、良人に百倍まさりし勇士なればとて、いかに重緣の身寄のものなればとて、二世と契りたる亡夫をさしおきてもあだし人に見遇へとは情ある主君の仰ともおぼえず。

吾が亡夫の名を繼がしめて家をも絶えさせじとの御心づけは世に忝けなく嬉しけれど、そは又外にせんすべもあるべきに、あなうらめしの御はからひや、あなつれなの御もてなしやとばかり、今はかくときはめたる覺悟の、さかるとも聞き奉らじ、打たるゝとも承らじ、强ひてとのたまはゞ死ぬるばかり、猶もとすかし玉はゞ是までなりと流石は勇士といはれたる人の片身の女心信として動かざること磐石の如く又鐵石のごとし。

かくときゝて武田入道如何で腹立たざるべき。吾は源五郎の勇をいとほしめばこそかくはとりはからひつれ。姓字を絶たせじとおもへばこそかくはおこなひたれ。さるを女子の分際に婚儀をいなむとは不届なり。彌五郎をいむとは奇怪なり。いで其の義ならば一時も早く腹きらせよ。二の足ふみては死なずばきりて棄てよといきまきたけき老の一轍、なだむべうもあらず。

いたはしや源五郎の妻は二十に足らぬ花の盛を風前の燈になして、今は亡夫の墓邊に近づくを以て、せめてもの心やりとはおもひけり。

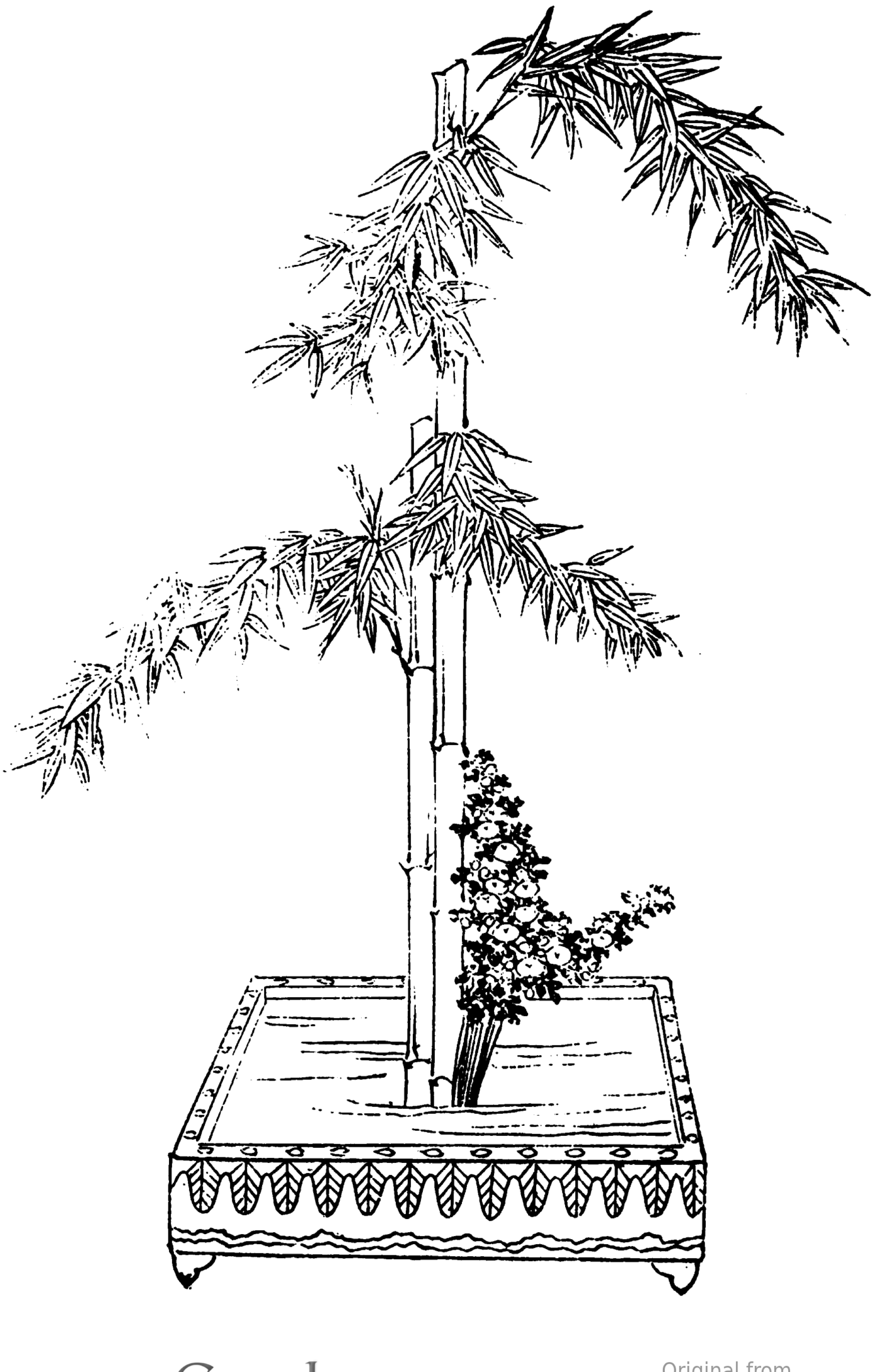
信玄の夫人三條殿はかくときゝつたへて、いとほしむこと一方ならず。あはれ、かゝる世のあさましさは忠臣は二君に仕へずといふ本文はありながら貞女二夫に見えずといふことの消え失せたる今の世に、かゝるためしは昔の節婦烈女にも耻ぢずといとゞしくゆかしがりて、かゝる女の我が配下にありといふこと、世間にきこえても吾が家のおもておこし之には過ぎじを、ばかりのことにて見殺しにせんはいとう不憫なりとて入道をさまざまいひなだめ、おのが手許に引取りて長くやしなひおかれたりとぞ。

あはれ、枯木春にあひて思はぬ錦をかざり、寒梅雪をしのぎて香うたゝかぐはしとはかゝることにや。

活花（十三）

田邊和氣子

年立て一月ばかりも日をふれど、まだ冬寒き空の氣色に、梅のみかつ〳〵咲そめて、こと花の梢は、しらず顔なるこそ、さう〴〵しけれ。かかる折には軒ばの竹の、雪に折れふしたるを、其儘に切り取て、大なる砂鉢に活置かば、雪折れの竹も中〳〵に心たらひ



ならんかし。寒菊の去年のまゝに殘りたるを、根〆にせむと雪打拂ひて、手折つる竹は枝葉のふりを見て、上と下にて切りて寸尺を定む。眞副ともふさはしき枝を見たてゝ殘し。下なる枝は切りてよし。眞副のふし同じ處にわらざる樣見合せて活べし。寒菊は普通の花の体の如く見斗ひてさすべし。

水上

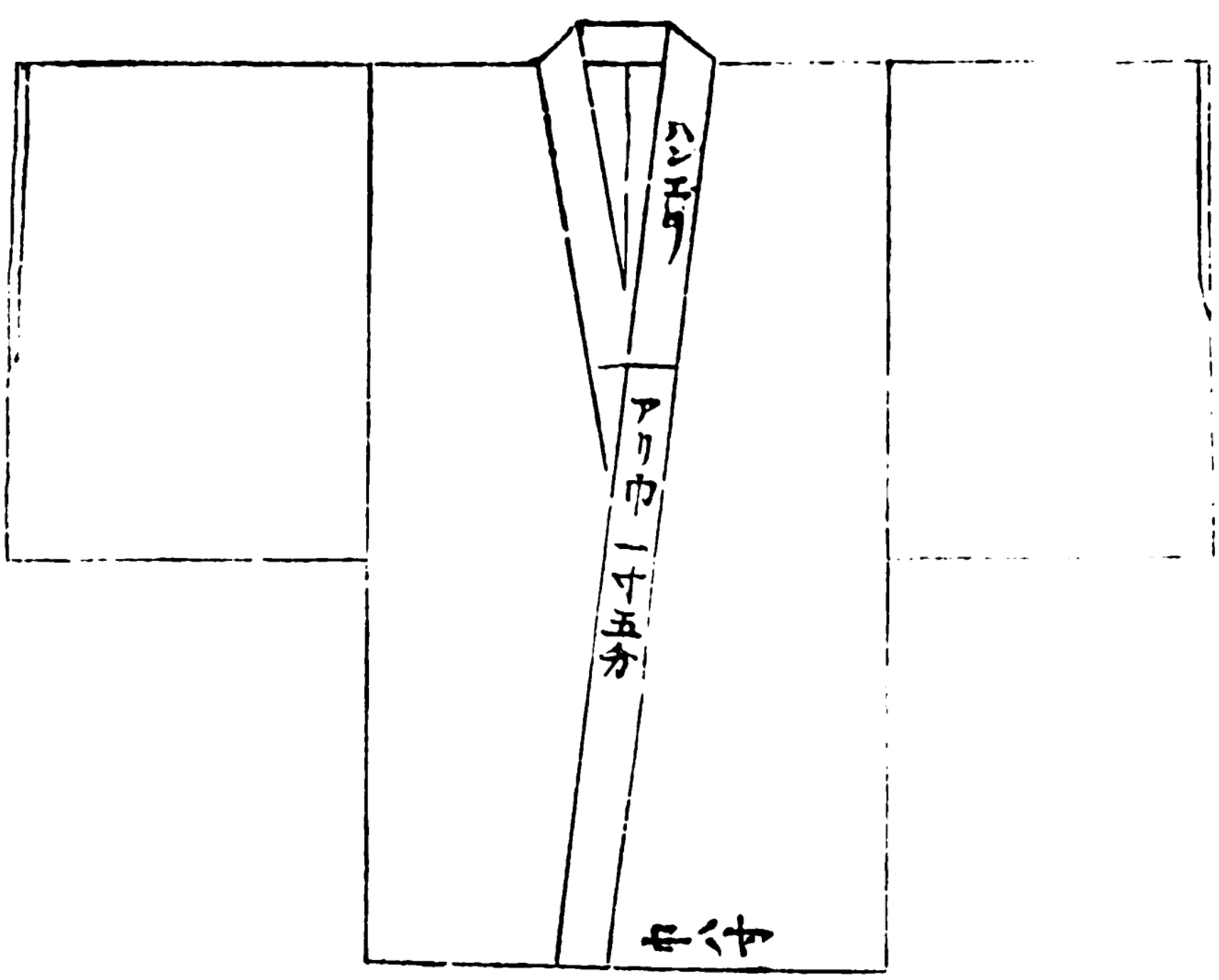
竹は一夜前に切り、よき程に寸尺を定め、下なる節一ッを殘し、上よりふしぬきにて節をぬくべし。さて上の節より、晩茶の煮たるに鹽を交せてうつしこむべし、口へは紙をつめ、葉には、鹽水を、ふき懸け、茣筵又は薦に包みて、軒下に置きて、次の日活るをよしとす。又は薦に包ます、水に活て、庭へ出し、夜露を取もよし。猶水上法いろ〳〵わり。

たちぬひ

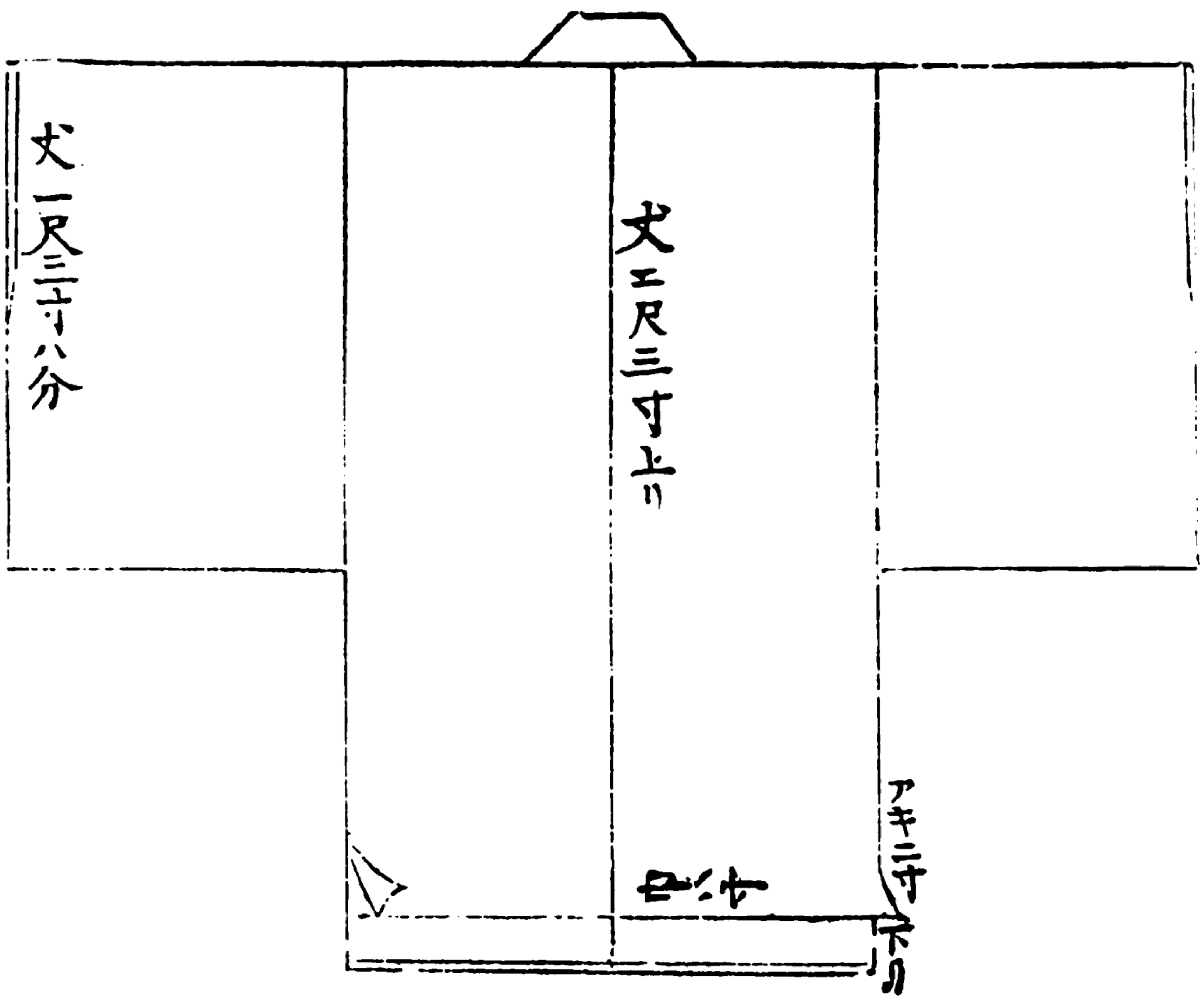
西山たい子

(廿二)胴着の縫方

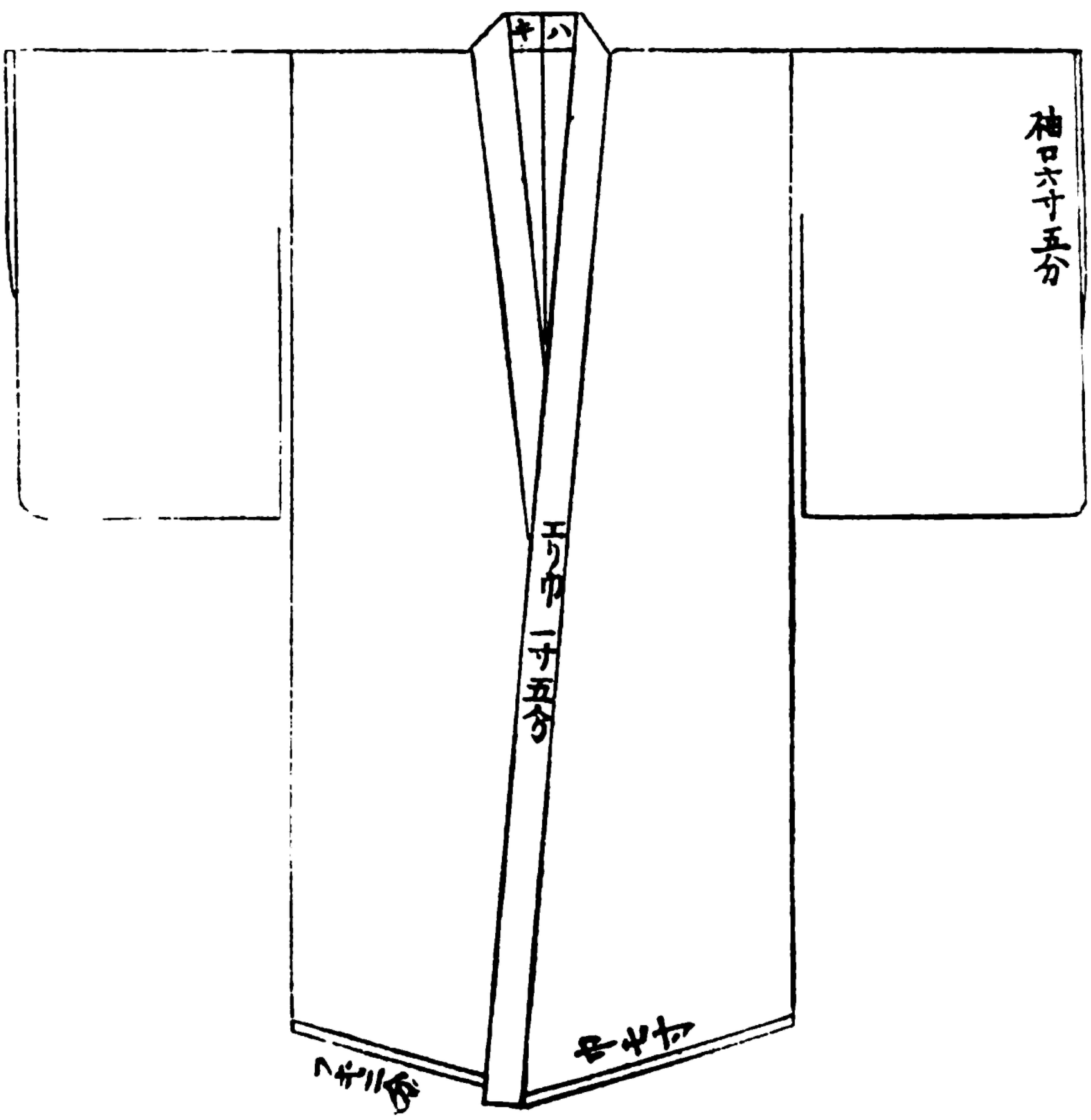
(男胴着正面の圖)



（同背面の圖）



（女長胴着正面の圖）



（女物は別にしるさず）

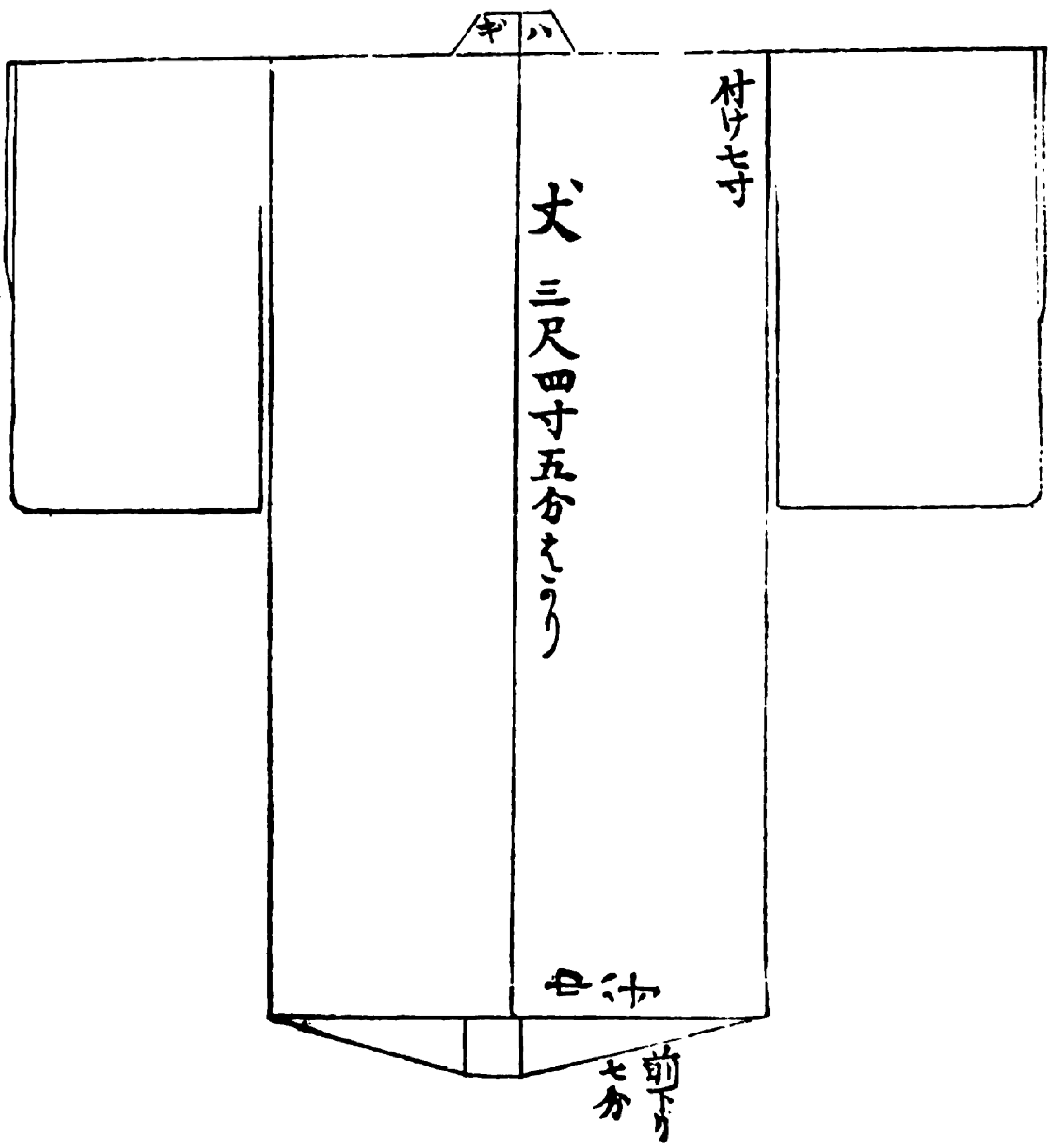
先づ四袖をぬひ、表裏各背を縫ひ、わき明、及び下の方をもすこしあけ、置きて、腋をぬひ、丈を定めて裾を合せ、前巾を定めて襟をつけ、四袖を付け、例の如くにして綿を入れ、引かへしてくけるなり。但し裁つときに、前なる方を二寸ばかり長くなしおくべし。前下りなく爲さんと思はゞ、別に長くなしおかぬもよし。男ものも、女ものも、縫ひ方は同じなり。たゞ、巾及

び袖付等の、異るばかりなり。圖を見合すべし。

(廿三)長胴着の縫ひ方

まづ四袖をぬひ置き、背腋を單物の如くに裏表とも縫ひて、二分ばかり裏の方をふきに出して、裾を合すべし。但し前の方を七八分ばかり、すぢかひになして前下りを成すべし。それより襟をつけ、四袖をつけ、例の如くにして、綿を入れ、ひきかへしてくけるべし。

(同背面の圖)



前號の、長胴着裁ち方に、前の見衣の方を、後身衣の方より、一寸五分長くせしが、八分より一寸ばかり長くなしおけばよろしきなり。しはすのいろがはしさに、遂ひ〳〵書きあやまりしなれば、こゝに訂正するになむ。

(寸尺等は其人に應じてよきやうになすべし)

だいどころ

大和芋の吸物

大和芋を洗ひ、皮を剝き、山葵卸にておろし、擂鉢にて能く擂り、扨て煎出の汁の鹽梅したるものを、沸騰たるところに前の擂りたる芋を、金杓子にてすくひ、其中に落し、更に汁の沸騰したるところを、椀に盛り、淺草海苔をかけて、吸物とするなり。

朧月の吸物

慈姑の皮を剝き、山葵卸にておろし、又魚肉（鯛鯡の類をよしとす）の皮を去り、細かに切り、之を擂鉢にて擂り、小麥粉少量と、前の擂りたる慈姑とを、之に混和し、味淋と食鹽にて、味を付け、扨て之を好き程に丸め、胡麻油にて、ザット揚げ、生海苔、獨活の類を取り合せて、吸物の種とするなり。

鯛の卷珍蒸

小鯛の鱗及び、膓を去り、背を開き骨を拔きて、之を醬油に漬け、別に炒り豆腐を製り、之に鷄卵を掛けて、攪き交せ置き、又た銀杏、キクラゲ、人參の類に味を付け、前の炒豆腐に混じ、之を鯛の腹中に詰めこみ、扨て其鯛を蒸籠にて蒸すときは、出來るなり。

氷頭膾

鹽引の頭を二つに割り、其氷の如く透きとほりたる部分を取りて、薄く切りて、水にて能く洗ひ、尙水に漬け置くこと半日ばかりにて、鹽出をなし、扨て大根卸と、獨活の能き程に切りたるとを、加へて、三杯酢にて味を付くべし。

干鯣の甘酒漬

干鯣を二三日間水に漬け（度々水を取りかふべし）置きて、陰干となし水を乾かし、別に麴一枚に、米三合の割にて、甘酒を製り、其出來たるとき、乾きたる干

鯣を好き程に切り、又た鹽引鮭を小さく切り、瓶杯の器に、右の甘酒を以て、此切りたる干鯣と鮭を、一層置に漬込なり。半月程經れば、鮭の鹽は干鯣に移りて、好き鹽梅となるなり。但し右甘酒の量に對し。干鯣は大なるもの、五枚鮭は通例のもの、一尾の四分一とす。

時雨蛤

蛤の剝身を能く洗ひ、沸湯をとほし、別に生姜の皮を剝き、薄く切り置き、鍋に味淋と醤油を入れて、沸立たるところに、前の生姜と、蛤を投じ、汁の無くなる迄、煮るなり。但し醤油は品もの丶上にのる位に、タップリにすべし。

埋豆腐

豆腐の汁を製り、之を椀に盛り、其上に炊たての飯を置くなり。豆腐、飯に埋めらる丶ゆゑ、此名あり。寒き時はよきものなり。

このごろ

鋤柄義子

ぶだうのつるきりてよろしかるべし。

寒中につみたる土肥は、さくもつに虫のつくこと、少しときく。

茶、くは、こうぞ、などにはこれをしたまふべし。

二十日は大寒なり。ふきのたふ花さくころなり。

ぶだうに肥をしたまふべし。肥は酒かすを水にときて用ひたるがよしといふ。

寒中なれど、蠶のたねがみを、水にひたしたまふべし。いかゞのやうにおぼゆれども、かくすれど、虫つよくして、生育よろしく、あまりにはやく發生するをふせぐをうべし。

俵物をたくはへおくに、ゑは五勺ばかりを、紙などにつ丶みて、その中にいれ寒中に、中ゆひをつよくしめおけど、夏になりても、虫の生ずること少し。

麥のたねに肥をしたまふべし。

三十日はかしこくも　今上天皇の　御父の天皇にまします　孝明天皇のかんさりましゝ日にて、この日朝廷にては　御みづから　御祭あらせたまふ。たれもみな遙拜つかまつるべきなり。

たきゞは、このごろきりおくべし。

寒中にすべて、さらしものなど忘れたまふべからず。そばの粉などは、今ひきおけど、夏になりても、虫のつくことなし。菜のたねにこゑをすべし。

二月になりたらば、植ものなど、工夫したまふべし。農家などにては、鎌、鍬など其他なにくれの道具などのそこなはれたるをば、なほしおきたまふべし。

二月の三日の日はせつぶんなり。去年花のうるはしきをなごりに、人みなに惜まれて、暮れて去にし春の、またあらたしく立かへるなり。年立かへりて、正月になるを、心得あやまりて、春になると思へる人もあるめり。新年のうたをよみたまふに、年のたつといふべきを、春になりたるやうによみたまふなどは、あやまれり。年と春とは必ず同じ時に立つものにはあらず。むかしは年内の暮のうちに、春のたちしこともありしなり、されど、古今集にも『年の内に春はきにけり一年をこぞとやいはんことしとやいはん』とあり。田舎などにて、年と春とおほかた同じ時に、たちたるふるきためしをそのまゝ心得て、新年の回禮にゆきて『新年おめでたう』あるは『あけましておめでたうぞんじます』となどいふべきを、まだ春にもあらぬに『よい春でおめでたう』といふもあるめり。あまりくだ〴〵しきやうなれども、心つきたれば申すなり。

うど、みつば、などにだん〴〵ごみをかくべし。

四日は祈年祭。朝廷にても、國々大中小の社々にても、みなおこなせらるゝなり。この祭はいとふるき世よりある祭にて、ことしの五穀豐饒を、いのり奉るなり。うぶすなの社にまうでたまふべし。

學園

日本文典（三）

堀井正男

通音の中の縦通の事に就きては、前回に述べたり。さて、横通といふは、或は通韻と稱する文法家あり。これは、前にもいへる如く、同段の音が相通するにて、則ち「あ音」が「わ音」に成り、或は「は音」に成り、或は「さ音」が「た音」に成り、或は「ひ音」が「み音」に成り、「ふ音」が「む音」に成り「す音」が「つ音」に成り「も音」が「ば音」になり「の音」が「と音」に成る如く、同段の中にて、聲の相變ずるをいふなり。例へば女親を「はゝ」といふべきを、室町の末つ方より、地方によりては「かゝ」といふやうなれる如し。「は」と「か」とは同じく阿段の音なり。斯の如きを横通といふなり。今一二の例を示さむに第一に阿段の音の相通ふ例は、

あれ（吾）　われ　あなた（彼方）　かなた
はつか（僅）　わづか　はしる（走）　わしる
しまらく（暫）しばらく
けさむ（消）　けたむ　さやぐ（騷）　さわぐ
かむ（淅）　かま　いたゞき（頂）　いなゝき
れなじ（同）　れやじ

また以の段の音の相通ずる例は

ひろか（密）　みろか　へみ（蛇）　へび
さびし（淋）　さみし　かなしび（悲）かなしみ
けし（消）　けち　なみは（浪速）なには

の如き類にて、また宇の段の音の相通ふ例は、

けぶり（煙）　けむり　けす（消）　けつ
かたぶく（傾）　かたむく
たはぶれ（戯）　たはむれ

わすらる。(忘)　わすらゆ。　うし(大人)ぬし

などの如き類にて、また衣の段の音の相通ふ例は、

なべ。(並)　なめ。　うかべ。(浮)うかめ。

すべ。らぎ(天皇)　すめ。らぎ

ゆきかね。(行難)　ゆきが。て

の如き類にて、また次に於の段の音の相通ふ例は、

とも。しび(燈火)　とぼ。しび

とも。す　とぼ。す　ひも。(紐)　ひぼ。

をとこ。(男)　をのこ。

などいふ類にて、なほ此の類は多かれど此處には大要を示すのみ。此の通韻の中にて、「ハ」と「ま」、「ひ」と「み」、「ふ」と「む」、「へ」と「め」、「は」と「も」とは、相通ふ事殊に多くればゆ。かゝる事は、古書を讀むにつきても、れはかた心得ざれば、叶はぬ事なりかし。また、此の通音の規則を以て、漢字の音をなだめて、一種日本風に、やさしくよみ來れるものなり。

催馬樂に、

せうそこし、とぶらひくるや、さきんだちや

とあるせうそこの如き、又拾遺集の歌の端書に、

月あかき夜、門の前をわたるとて、せうそこいひ入れて、侍りけれど、

などあるも、又源氏物語の箒木の巻に、

たもうたまへずながら、日頃ふるまで、せうそこもつかはさず、

などあるせうそこは皆せうそく(消息)をかく通音の規則にて、なまらせいへるなり。「く」音と「こ」音とは同行の音なり、故に縦通の規則に從へるなり。

略音

音の重なる工合によりて、自ら其の中の或音が全く取り捨てらゝることあり。これを略音と稱するなり。さて、その略かゝることも、一定の規則に從へるにて、よく省かるゝは、

一、阿行の五音(アイウエオ)
二、良行の五音(ラリルレロ)
三、イ、キ、シ、チ、ニ、ヒ、ミ、リの八音、
四、二個重なりたる同音の一個

の四種にして、一例を示せば、

たかあまがはら(高天原)を　たかまが原。
ますあらを(益荒雄)を　ますらを。
かりいほ(假庵)を　かりほ。
かはうち(河内)を　かうち。
よれも(四面)を　よも。

これは、ア行の五音の中の「アイウオ」の四音を略きたる例なり。エ音の略かれたる例もあらむが、元來我國の言語には、「エ」といふ音を、冒頭に有せる語極めて少きゆゑに、今此處に、「エ」音を略きたる例を、容易に發見する能はざる故に、これは云はず。元來言葉の首にあらはれたる母音即ち阿行の五音は、よく略かるものにて、例へば穴(アナ)を「ナ」といひ、岩(イハ)を「ハ」といふ如きことは、澤山なる事にて、後世に至れるに從ひて、かゝる母音を略く。多し。いだく(抱)をの「い」を略きて、單にだく(抱く)とのみいひ、野菜の中のうごま(胡麻)「う」を略きて、單にごま(胡麻)といひ、孫(うまご)の「う」を略きて、單にごま(孫)と稱するやうなれり。かゝる語は、皆その上は、首に母音を有せしなり。故に、その上には、濁音が一語の首にあらはるゝ事なかりしなり、良行の五音の略かれたる例は、榮花物語の鳥部野の巻に

御有りさまを、くすしに語りきかすれど

などあるくすしは皆くすりしの「り」の略かれたるなれど、また土佐日記に、

人にとへど、八幡の宮といふ。これをきゝて人々拜み奉る。山崎の橋見ゆ。うれしきことかぎ

りなし。
などある。すべてをがむといふ語はをろがむといふ語の「ろ」の略かれたるなり。又、後拾遺和歌集の歌に、

やま櫻心のまゝにたづね來て
かへさむ道のほどは知らるゝ

などあるかへさは、やがて歸へるさの「る」の略かれたる語なりかし。其の他「國遠かば」などいふは、「國遠からば」といふべき「ら」を略きたるにて、「れ」を略きたるは、例へば、誰れがをたがといふ如し。

「イ、キ、シ、チ、ニ、ヒ、ミ、リ」の八音の略かるゝ例は、例へば、いづいし(出石)のいを略きていづしといひ、やどいる(宿る)のいを略きて、やどるといひ、柳川(やなぎがは)の「ぎ」を略きて、やながはといひ、足踏(あしぶみ)の「し」を略きて、あぶみといひ、はちす(蓮)の「ち」を略きてはすといひ、くにずみ(國栖)の「に」と「み」とを略きて、くずといひ、はやびと(隼人)をはやとといひ、しらがみ(白髮)をしらがといひ、まがりたま(曲玉)をまがたまといふ如し。

同音の二個重りたるを、一個略くは、例へば、たび人をたびとといひ、かははら(河原)をかはらといひ、金なべをかなべといふ如し。

(未完)

民のかまど

井上頼文

高き屋にのぼりて見れば　けぶりたつ
民のかまどは　にぎはひにけり

此の歌をしも、かけむもかしこかれど、難波の高津の宮に、あめのしたしろしめし、仁徳天皇の御製ぞと、誤り傳へけるこそ口をしけれ。さるは、此の歌に、高き屋などあるより、よくも、國史を考へぬこざかしき輩が、彼の尊き御事實をさへ、かにかくとあげつらふにいたりたればなりけり。

なかにも、いとをさなき議論にはあれど、

難波あたりは、平坦なる地にて、遠を望むにたよりなき所なり。高き屋は、いかに高からむとも、此の平地に建てたる樓上、いかで、四方ののぞまるべき。よし此の平地に、天を凌ぐ高臺を建てたりとするも、一朝大風の波をかすめて吹き來るあらば、高きうてなは、瓦の如くくづれむことを疑ひなかるべし。こは、聖代をほめ過したる例の文飾にて、實際ありたることにはあらじ。たゞ難波のさゝやかなる所を見そなはしたるまでならむ。

といへるごときあげつらひ、ものにみえたり。

あはれ、此の一首の歌の謬傳より、かゝる淺はかなる輩をして、事實をさへ誤らしめ、ついで、大に御仁德をまで、かにかくといはしむるは、いとかたはらいたきことならずや。

いでや、かゝる初學の爲めに、

先づ、烟を望みたまひしは、宮殿にあらざりしことを辨へ、

次に、高き屋の歌は、後人の作にして、御製にあらざる所由を辨へてむ。

そもそも、烟を望みて、黎元を撫で給ひしは、高き山嶽に登りて、四方の村落の形勢を見そなはし、畿外の諸國も、かくこそあらめ。都に近きわたりだに、民草のかまどの烟は、かれがれなるに、まして、王化にうるほはぬ邊陬は如何あらむ。仁風の及ばぬさかひは、如何あるべきと、遠く深く思ひなげかせ給へるなりけり。

さるを、高き屋としも誤れるは、

日本紀、仁德記に

四年春二月己未朔甲子、詔群臣曰、朕登高臺、以遠望之、烟氣不起於域中、以爲百姓既貧、而家無炊者云々。

また。七年夏四月辛未朔、天皇居臺上而遠望之、烟氣多起云々

と見えたるよりのことなるべし。されど、此の事、古事記には、

於是 天皇、登高山見四方之國、詔之、於國中烟不發、國皆貧窮、故自今至三年、悉除人民之課役云々、後見國中、於國滿煙。

とあり。これぞ正しき傳へにして、動くまじき事實にはありける。

山に登り給ひて、國のありさまをみそなはしましけむことは、なほ、これより先、畝火の橿原の宮にあめのしたしろしめしゝ、神武天皇の御所業にも見えたり。神武紀に、

三十有一年夏四月乙酉朔、皇輿巡幸、因登腋上嗛間丘、而廻望國狀曰、妍哉乎、國之護矣。

と見え。

また、これより後、高知の岡本の宮に、天の下しろしめしゝ、舒明天皇、香久山に登りまして、國見したまひて、

やまとには むら山あれど 取りよろふ 天の香久山 のぼりたち 國見をすれど 云々

と、よませ給へること、萬葉集に見えたり。これらを思ふに、山に登りて、國見し給ふことは、上古より天皇の、民を惠み、國を治め給ふ、遺風にして、即て、皇祖皇宗の遺訓にましましけんと考へ奉るなり。

ろは、かしこかれど、 天孫 天津日高日子番能邇々藝尊も、筑紫の日向の高千穗の、久士布流多氣より、國見して、笠沙の御前を、朝日の直刺す國、夕日の日照る國なりと見定め給ひて、底津石根に、宮柱ふとしり、高天の原に、氷椽たかしりて、初めて宮所定め給ひけむも、同じ御所業と窺ひ奉らるれぞなりけり。

さて、高き屋の歌は、
延喜六年の、日本紀竟宴歌集に、
得 大鷦鷯天皇　左大臣　從二位　兼行左近衛大將　藤原朝臣時平
多賀度能兒　乃保利天羨禮波　安女能之多　與母爾計布理氏　伊萬蘇滿美奴留
とあれど、其の本は、時平公の作なること、爭ふべくもあらず。さるを　仁徳天皇の御製ぞと、いつしか思ひあやまりて傳へけむ。そを新古今集、賀の部に、

貢物ゆるされて、國富るを御覽して、
仁　徳　天　皇
高き屋に　登りて見れど　けぶりたつ
民のかまどは　にぎはひにけり

と、後世ざまにあらため載せられたり。此彼合せ考ふるに、同じうたなることは、いとしるかり。さるを、新古今集に、かくざまに改め載せて、 仁徳の御名をさへ掲げたるより、いよいよ世の中には、その誤をひろめたるなりけり。

試に、紀記に載せたる、此の　天皇の御製とよみくらべ見よ、歌の調も此の時代のものにあらざることは、言をまたで明らかならずや。

にくむべきかな。僅に、此の淺薄なる高き屋の歌一首の誤傳よりして、かしこくも、六とせの間、課役を停めさせ、大に民力を養成し給ひし、廣き厚き御仁徳をまで、聖代を過譽せる、文學者の筆の花なりとやうに疑はしめたること。

然るを、此の事實を辨へむとはせで、樓上におはしまして、民のかまどの烟をのぞみ給ふ、御かたゑがける繪師もあり。それに、例の高き屋の歌をしるして、御製ぞと褒めたゝふる歌人もあるは、いかにぞや。

さきに、此の　天皇の題をゑて、れのれがよめるゑせ歌

國見して　ときしゑだちは　のぼります
山よりたかき　めぐみなりけむ

歌はつたなかれど、ろのかみのありさまど、ふかされはみこゝろとを、しのびまつりてなむ。

漫録

れきの玉藻（四）

永石徳文

小兒のしつけかた

小兒は十歳より内にて早く敎へいましむべし。性惡くとも、能をしへ習はさば、必よくなるべし。いかに美質の人なりとも、惡くもてなさば、必あしきに移るべし。年少の人の惡くなるは、敎への道なきが故なり。習ひをあしくするは、たとへば馬にくせを乗付るが如し。いかにくせ馬にても、能乗手の乗れば、よく成ものなり。又鶯のひなをかふに、はじめてなく時より、別に能さへづる鶯を其かたはらに置て、其音をきゝならはしむれば、必よくさへづりて、後までかはらず。是初よりよき音をきゝてならへばなり。禽獸といへども、はやくをしへぬれば、善に移り安き事かくのごとし。況や人は萬物の靈にて、本性は善なれば、いとけなき時よりよく敎訓したらんに、すぐれたる惡性の人ならずは、れどり、あしくならん人を敎訓せずして、あしくなり、其性を損ずるは、をしむべき事ならずや、(兩葉支鑑)

飯酒をいましむべきこと

子孫幼き時よりかたくいましめて、酒を多くのましむ

べからず。呑ならはゞ、下戸も上戸となりて後年に至りては、いよ〳〵多くのみはしいまゝになり、あしきくせとなりては、一生あらたまらず。禮記にも、酒者所以養老也、所以養病也といへり。尙書には神を祭るにのみ、酒を用ゆべき由をいへり。去かれど酒は老人病者の身を養ひ、又神前に備へんれうに作れるものなれど、年少の人のはしいまゝにのむべき理にあらず。酒をむさぼる者は、人のよろめも見ぐるしく、威儀を失ひ口のあやまり、身の誤りありて、德行をそこなひ、隙を費し、財を失ひ、名をけがし、家を破り、身を亡すも、多くは、酒の失よりおこる。又酒を好む人は、必血氣を破り、脾胃をそこなひ、病を生じて命短し、故に長命なる人、多くは、下戸なり。たとひ生れ付酒を好むとも、若き時よりつゝしみて、多く飲べからず。凡上戸の過失は甚多し、酔にのりては、謹厚なる人も、狂人となり、云まじき事を云、なすまじき事をなし、言葉すくなきものも、言葉多くなる、いましむべし。酒後の言葉つゝしみて、多くすべからず。又酔中のいかりをつゝしみて、酔中に書狀を人に送るべからず。むべもむかしの人は酒に名付て狂藥とはいへりけん。貧賤なる人は酒を好めど、必財を失ひ、家をたもたず。富貴なる人も酒にふけれど、德行亂れて、家を破る。たかきいやしき、其わざはひはのかれず。いましむべし。(同上)

林大學家訓

一　忠義は末代出世の手本

一　親孝行は我子孫のため

一　民を憐む君は日月の如し

一　民を貪るは嫩の草を摘む如し

一　不忠不孝たるものは人面の獸

一　誠は寶のあつまりところ

一 讀書は能道の案內者
一 自慢は知惠の行當り
一 名聞は張籠の虎の如し
一 信心は實の心の顯れ
一 朝夕の看經は其身冥加の御禮
一 問ひ弔ひは其家長久の證據
一 家業はげしきは賑ひのもとゐ
一 非道の金持は三つ子に花を持せし如し
一 能金持は隱德の報い
一 隱德は樂隱居の下拵ひ
一 奢者の末は世上の厄介
一 商人は賣先買先は父母の如し
一 無慈悲の吝坊は寳の番人
一 始末と冥加を恐るゝ人
一 手習は通用の目の療治
一 辛抱は物每成就の元手

一 堪忍の成らざるは心の掃除の足らぬ故
一 短氣は其身を亡す腹切刀
一 諦めは心の養生
一 堪忍は其身長久の基
一 我慢は拳の當處
一 嫉妬は其身の仇敵
一 喧嘩口論は後悔の元手
一 家內和順は福神の御祭
一 足る事を知れば福人なり
一 家內喧嘩は貧乏の種まき
一 後悔は其前方の不案內
一 博奕は毒を知りて毒を呑むが如し
一 佞人は眞綿に針を包むが如し
一 人を妬むは哀の下地
一 橫取は罪科の掃溜
一 人をあしく言は巳が惡きゆゑ

一　有の儘は正直の看板
一　小食は長壽の驗し
一　大食は命のとりこし
一　大酒遊藝は末の身の上しらず
一　惡人は刀の試しもの
一　善は五常の鑑

林家はもと儒學の家なり、その心して見たまふべし。家訓なれど、かにかくに論ふべくもあらざめれど、こゝろみにいはんに、はじめの二ッは意たらず、痒きところに手のとゞかぬ心地す。次の二ッは、禪讓放伐をもて立つ國ならぞしらず、わが國には用なき言葉なり。朝夕の云云はいかに、其他は實にめでたしや。我身にひきくらべて、朝夕の心がけとしたまはゞ益多かるべし。

敷嶋道の考

遠山いね子

こは故八田大人のかきのこしおかれしを、このごろみいでたれど、何かの料にもとて、かきうつして、送りまゐらするになん。

敷島の道といふ名は、中昔より聞え來て、のちにはたゞに道ともいひならへりしが、打まかせて道とも唱へんは、君おやにつかふるよりはじめて、大御政事の上などあらめ、そのかじゝ見る物、聞ものにつけつゝ、うめきいづるそゞろことをぞ、いかでさは事々しうなど思ひもぞかるゝにつけて、つらく其由をおもひたどるに、こは必すしか唱ふべきいはれなんありける。さるは神ながら治め給ふ大御國といへども、文てふ道のひらくるにしたがひて、漸々に人心さかしくなりもてきて、おもての義理てふものをむねとし、よろづ用意がちに、僞のおほかめれど、紀朝臣もかしこき

大御代にありながら今の世中色につき、人の心花になりにけるより、云々など論ひ給しやうにて、彌くだちての世には、人とまじらふ道も、魂あへるどちこそあれ、大かたはうはべの親しみのみにて、いとたのみなく成つるを、猶かみの代の道の誠のしかすがに、歌にのこりて、その世中の理りにかゝはらず、恥かしき思ひのくまをもうたひ出つゝ、心をやる道にてあれど、そをやがて我式島の道としも、唱へきつるは、いみじうよしある事ならずや、されどかの朝臣、古今集をゑらびて、ふたゝびその道をおこし給へるは、しばらく歌てふものゝ、上にこそあれ。神の御國のあやにくすしき道のまことを、うまくあぢはひ、ふかくさとりて、まさきのかづらながく傳へ、青柳のいとたゑぬいさをゝ、のこしたまへること、かのみづからのはしふみにもいちじるきを、事の心をもゑたらん人は、それはそらの月をみるがごとくいにしへをあふぎて、我みちをたのしまざらめや。

はね はでいた

井上頼文

年の初め、兒女子のもてはやす玩具の中にて、尤も筋肉の發達をたすけ血液の巡環を導き、身體のために、いとよろしきものは、羽子をつくあそびなりけり。されど、小兒必用記と云ふ書にも、このあそびを賞揚して曰く。

毎年正月に、女子は、欒華子に、羽をつけて、板にてつかしむるなり、これを、こきの子と名づくなり。こきのこといふ木の實の形に似たるをもていふなり。こきのこといふもの叡山にあり、他處にて見ぬものなり。その實、山梔子の形のごとくにして、山梔子よりは、實の尖りのさき長くして、粒は圓くあれど、そのまゝ欒華子に、鳥の羽をつけたるがごとく見ゆるな

り。世諺問答には、をさなきものの、蚊にくはれぬまじなひ事なりと云へり。案ずるに、さにはあらじ。小兒は熱の強きものなれど、此戯をなさしめて、風にふかれ、空にむかひて、氣をはかしめて、熱をもらさせんとの事なるべし。いづれの代よりはじめたる事にや。男の子の紙鳶を擧ると同じかるべきなり。倭學に達したる人にたつぬべきなり。と見ゆ。

さて、こきのこと云ふもの叡山にある事は、温故隨筆に、叡山の無動寺、又、日光山などに、コキノコといふものあり。呉越春秋に、胡鬼樹といふ。本草に都捻子見ゆ。卅二品のうちなるべし。

後水尾帝御製

つくむねのそれにはあらでこきのこの
　　こよひの月は空にすめすめ

山法師のうたに

こんたうや無動寺山のたからまん
　　あへては魚にまさりこそすれ

コキノコを、たからまんと云よしなりと見えたり。

をさなきもの、蚊にくはれぬ云々とあるは、世諺問答に、問て曰、をさなきわらはの、こきの子といふてつき侍るは如何なる事ぞや。

答、是はをさなきものゝ、蚊にくはれぬまじなひことなり。秋のはじめに、蜻蛉といふむし出來ては、蚊をとりくふものなり。こきの子といふは、木連子などをとむばうがしらにして、はねをつけたり。是を板にてつきあぐれど、おつるとき、とむばうがへりのやうなり。さて、蚊をおそれしめむが爲にこきのことてつき侍るにや。とあるをいへるなり。

さて、こき板、こきの子をつくりたる始めは詳ならざれど、室町將軍家にては、例年十二月十九日に、こき板十二を箱に入れ、（閏月ある年は十三なり）御大工及棟梁頭より進上す。又光雲院よりも進上あり。將軍

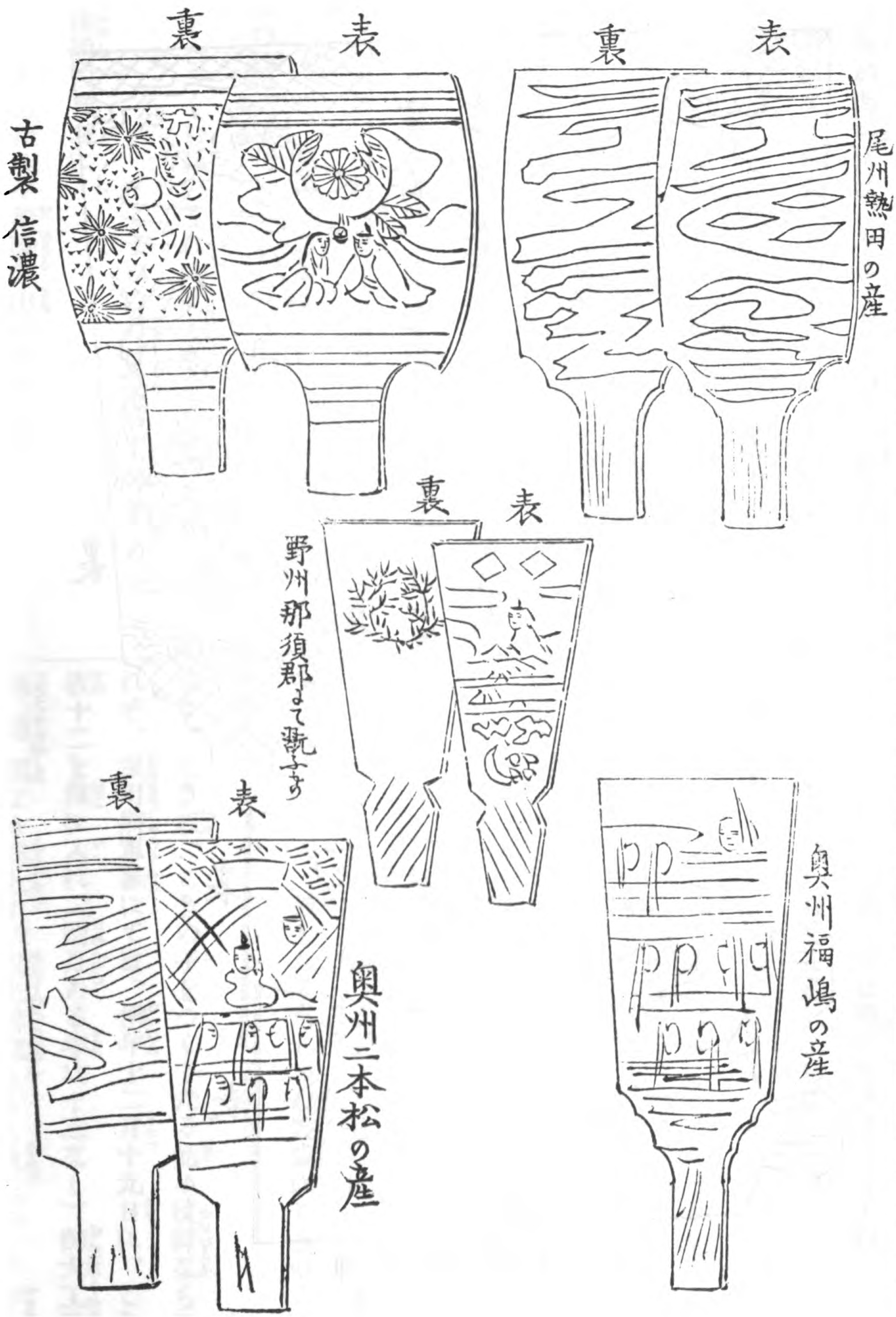


寛永時代　置上ケ彩色　左義長の羽子板
大サたて一尺五寸二分　よこ　三寸八分　厚サ二分五厘

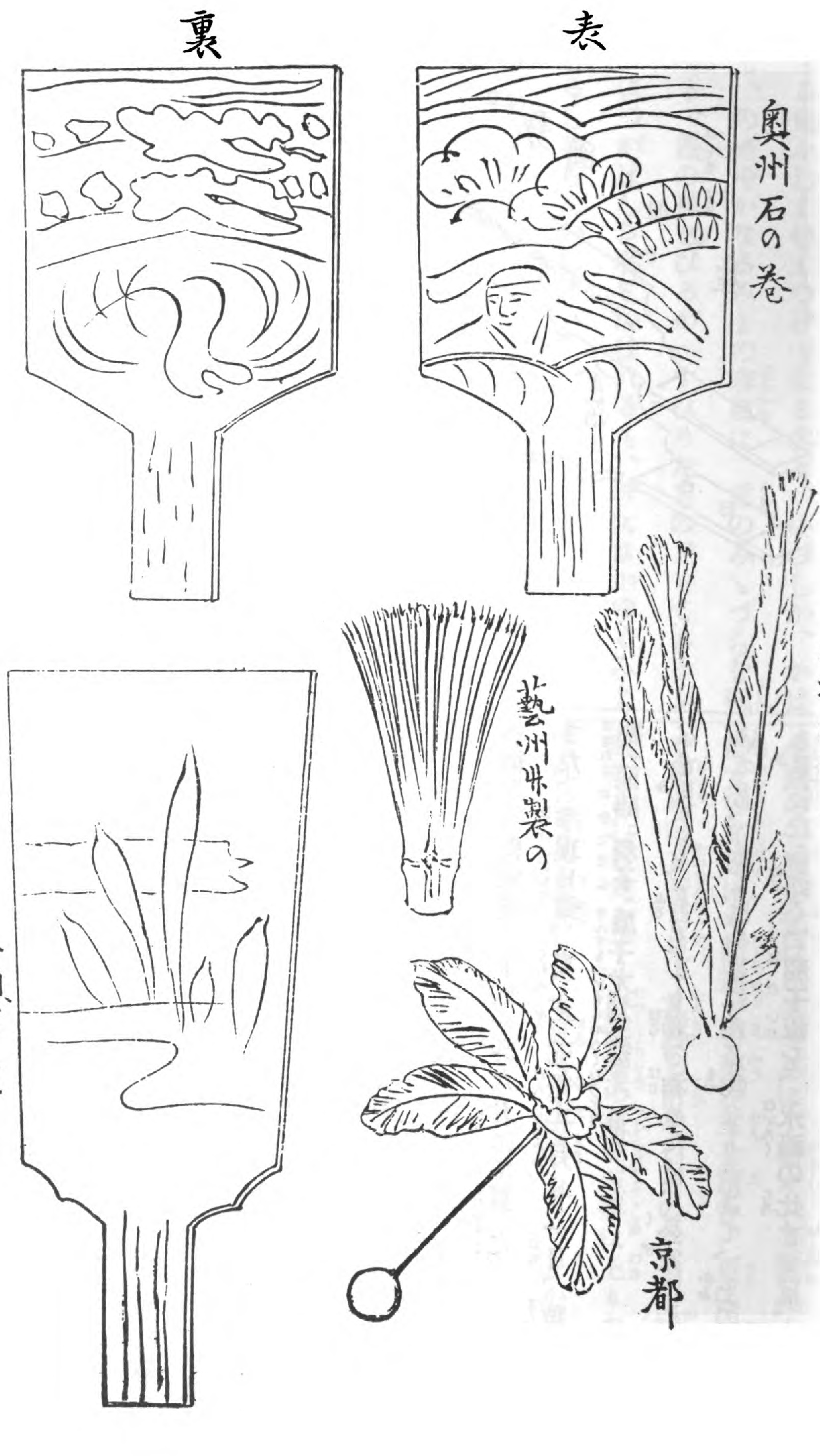


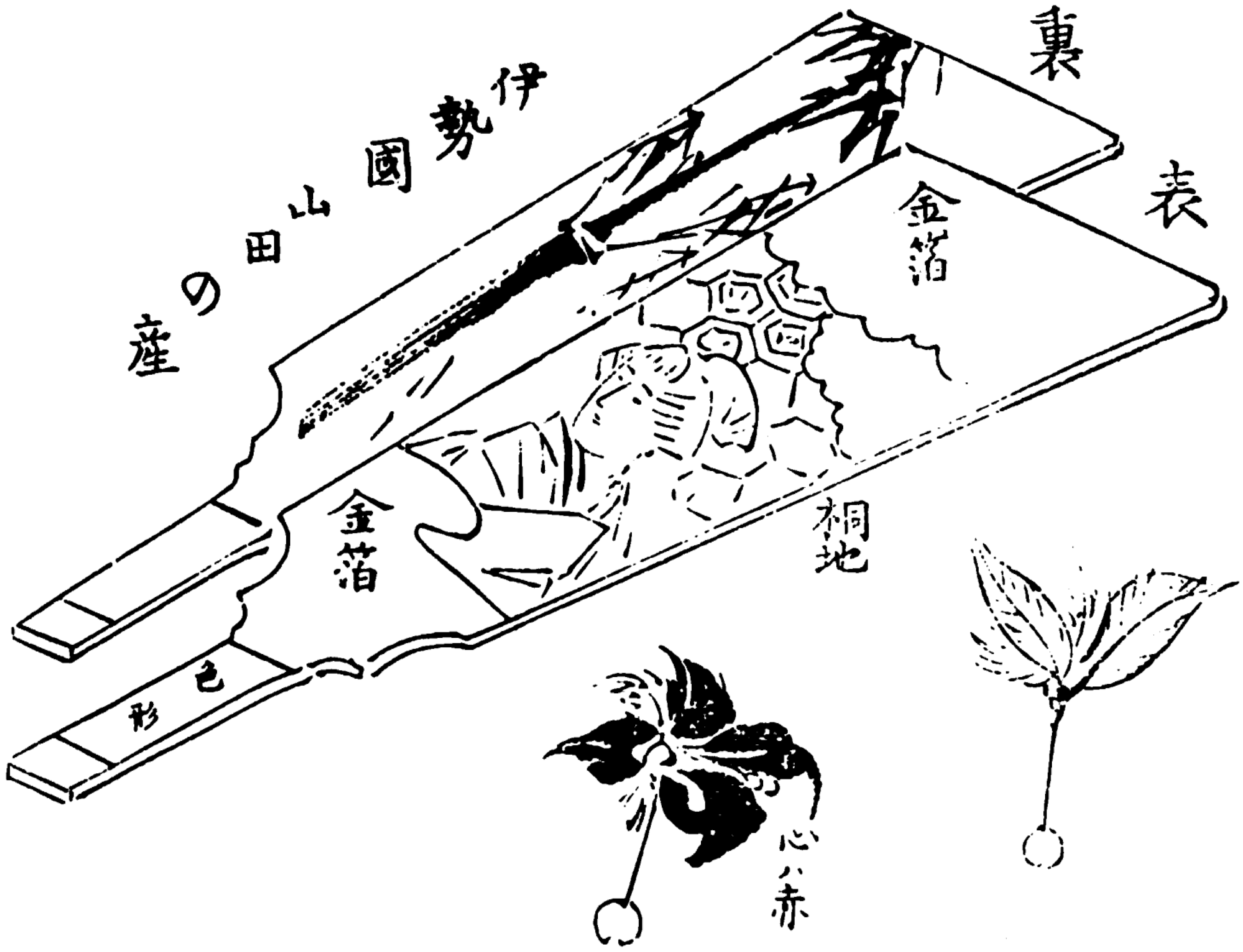


甲州市川の産



裏
表
古製 信濃
裏
表
尾州熱田の産
裏
表
野州那須郡にて製す
裏
表
奥州二本松の産
奥州福嶋の産


裏
表
奥州石の巻
出羽の羽子
藝州米製の
上總の産
京都



家にては、正月一日之を臺にすゑて飾る。其後御所々々へ少々づゝ獻上するよし、年中常例記、年中恒例記等に見ゆ、

又後崇光院御記、永享六年正月五日の條に、室町殿より宮御方へ、毬杖三、枝玉五（色々彩色）こき板二（蒔繪置物繪等風流）こきの子五被レ進、言語道斷殊勝無レ目了、御自愛無レ極とみえ、

また、公家にても節季に此物調へて、春の初の料とすること、多聞院日記に、天正四年十二月十六日、はご板御なべ御喝食へ下代一斗六升にて買レ之、

また、季瓊日錄、寬正五年正月廿一日、被レ覽二猿樂一而賜二羽子一扇子尤爲二寵光一也。

など見えて、古くより春の初めには、公家にても武家にても、もてはやされたる物なり。さて、上の諸書にも見えたる如く、羽子板を、永祿の比までは、胡鬼板（古節用集に、胡鬼板とあり）とよび、羽子を、胡鬼の

子(元長卿記には、胡毬子と書けり)と呼べりしなり。かゝる鬼々しくむくつけゝなる名も、いつしか、かはりて、のどやかなるみよの春風に、雲のみゝづらを櫛けづり、霞の袖をひるがへすひめたちの、もてあそぶに、につかはしき名とかはれるも、げにさかゆくみよのしるしならんかし。

さて、羽子板のつくりかたは、雑談集に、表に譬へど、大臣家などの内々の祝儀の體を畫きたり。寸法不定と見ゆ。古今の沿革もあるべく、國々によりて大小の異同もあらん。今諸書に見えたる數種の圖を掲ぐ。

鎌倉懐古錄の一節

坂本三七郎

吾人は、遊びを好む、閑あれど古跡を尋ね、舊塚を問ふ、中につきて最も好む所は相州鎌倉なり。近頃病を養ふ爲に屡、鎌倉に遊び、彼を求め此を吊ひ、懐古錄なる一篇を作れり。其中一節を女鑑に寄せて、貴婦人令嬢の一願を乞はんとせしに、會々、女鑑九十九號に靜女の文題にて諸嬢が寄稿の文を讀み、更に吾人をして實地に其所を見、其跡を吊せしものをして感巳む能はざらしめたり。一度諸嬢の香口玉手に上りたるものなれども、吾人をして更に小田卷をくりかへさしめよ。

停車場を下りて、松幷木あり、如何に覇圖の舊時を思はしむるぞ、左して鶴が岡八幡に向ふ。華表は高く昔に異らざるも、其人既に去れり、兩側の堤、梅樹僅かに植ゑて、道其中を通ず、土人は云へり、政子が頼家を生めるとき、禱るが爲に築けるなりと、芝生は昔に同じ、梅も亦た當時のものにやあらんか、鶴が岡八幡の前に拜殿あり、是れ靜女が悲しき袖を翻して、靜や靜の戀歌を以て、舞ひ、頼朝に叱せられ、京師に歸らしめたる冷臺にぞある。身は吉野山の雪と倶に冷なれ

ども、何ぞ其情の濃かにして、且暖なるや、殿は寂として太鼓橋穹く、池古うして、敗荷雨に泣く、此池に紅白の蓮を植う、今は白蓮は萎れて紅蓮のみ多しと、潔白、清白、純白は、守り難きものにや。栗橋靜女の墓は吾人曾て詣でき、一白拍子今に其名を留め其操を稱せらる、一片の舞袖一襲の衣裳人之を覩んことを願ふは、嗚呼是れ何か爲にして然るか、靜女かこと女鑑九十九號の篇中詳に記されたり、吾人は今之を云はす。

鶴岡八幡石段の傍らに銀杏樹あり、公曉が實朝を殺さんとせしとき、女裝して此樹の下に隱れ居たる所なりと、今は小柵にて圍み注連を繞らせり。樹は千歳を閲して存すれども當時父子相賊し、兄弟相せめぎし事を思へば、遊ぶ人の感情は如何ぞや。前の舞殿、後の銀杏樹、相對して千歳怨仇の憾を殘すのみ。

更に轉じて扇が谷に出て、實朝が墓を訪へば、墓は政子の古墳と相隣れり。見る影もなき下には、女中の英傑と稱へられたる人も髪を留めて、鶴が岡祠前の石階に斃れし實朝の寃魂を埋むるを知るのみ。松風深くして落葉地に滿つ、何れを弔ひて、何れをか哭せん。公曉は是れ如何なる人ぞ、實朝は是れ何れの人の子か、更に政子なる婦人は盛徳の婦人、善美の女性が、諸孃に告げて問はんとするは、靜女と政子の間にあり。懷古錄の一節を寄せて、讀者諸孃の心の底、情の淵に訴へんとするは之が爲にぞあるなる。

靜女を九泉の下に呼び起して、其情を慰めんとし、政子を呼び起して其無情を責め、又た實朝を呼び起して、其懦弱を戒めんとす。政子の情に薄き、源家は亡びたり、無情の極、實賴を敎ふる道足らず、終に源家をして、滅亡の運に趣かしむ、政子が女中の英傑と謂はれしは、女性の徳義を失ひし證にして、其證は賴家を殺し實朝を殺しし所以なるを知れ。菱花一面、夢を買ひ

し情は是れ外祖北條氏に注ぎ　情にして、源家に注ぎし情にあらず。又た一の賴朝に注ぎし情にして、子若くは孫に注ぎし至情にあらず。而して終に外祖北條氏に覇業を奪はれたるは、是れ女性弱點の情にして、世の普通の女子と異なるなし。古の漢の呂后、若くは唐の即天武后、英蘇のメリー、當時の朝鮮女后の如き、大は國を抱きて情の淵に溺れ。小は一身を情波の中に沈ましめたる例あらずや。女性は情に濃かならんことこそ願はしけれ。且、情は多く一家の中に厚からんことを欲し、更に其情は正しきことを第一とす。政子の智或は才は、吾人願はし至情と至德こそ、一國の后たり、一家の母たり一箇の婦女として賴もしけれ。靜女が歌は如何に其人を慕ふ情の切なりしか、又如何に貞操變せざる意を示したるか、昔を今にするよしもなしと雖ども、一片の情凝て散せず。栗橋の畔に吟ひ又た、陸奥にある靜歸の里に泣きたり、靜の情と政子の情、順逆の地異なれども、果して、地を代へなば、政子の泣は今に於て靜の涙と異なるを知れり。何となれば源家の亡びしは、政子の情の薄きによればなり。靜女の心、逆境にありて、益々確し憐むべきかな。

案内者に導かれて行く。比企禪尼が居りし所なりと云ふ邊を過ぐ。見るものとてはなく聞くものは松風の響のみ。然れども、北條氏の古舘にして、且禪尼が居所と聞けば、彼が破障を繕ひて子を戒めたる事を思ひ出し、嗚呼子を教へ家を保たんとする婦女は禪尼の如くあれ。泰時時賴等の險約は、其人のみにあらずして、深く薰化の基あるを、靜女の情あり、禪尼の儉素若し幷せ得ば、一箇の盛德婦人を成さん禪尼が當時家を思ひ、子孫を戒めたる深情は、北條氏九世の久しきを保ちたる所以にして、一國の本、一家の基、婦女子儉約致戒のこと、決して空しからず。源氏は婦女の爲に亡び北條氏の永きは、婦人の德一部を助けたりと云ふも、

強ち無理の論にもあらざるべし。
大塔の宮に詣づ。土窟の傍一姫の社あり。社人云ふ。是れ大塔宮の土窟にあるとき、侍りし女なりと。今は彼錦の御旗を奪ひ、忠の爲に生き、義の爲に死したる村上義光の社と相並びて祀れり、一女子の芳烈社畔の井よりも深く、君を奉じて土窟孤燈の下、泣て一身を呈じて侍す。豈に波瀾起らざるのみならんや。古井涸る、赤誠汲んで盡きず。靜女の舞殿、義女の社畔諸孃徃て弔せよ。今の諸孃　夫を思ふこと、靜女の如くなれ。君を思ふこと義女の如くあれ。之を思へど及ばざるも、或は半ならん、政子の情政子の行の如きは、徒らに家を亡ぼし、子孫を殘はんのみ　比企禪尼の儉は、北條氏をして長かしめたる一原動力なるを知らずや。
鎌倉懷古錄の一節を寄する此のことし。

世の諺に就きて

鹽井　ふく子

或人我が宿に來りて、暫く物語りしけるに、ふと己が讀みさしの冊子をとりあげ、内なる美人の寫眞を見てありしが、やがて妾に向ひて云ふやう、人はあまり鼻の高きは出世せず、又唇のうすきは果報拙なしと聞きつるが、今この人の鼻の高きこと、唇のうすき事よ。見そなはせと、さしつくるに、をかしき事を云はるゝものかなとうち笑へど、笑ひ給ふな、そは眞實の事なりなどとて、その人もうち笑ひつゝ、やがて歸り行きぬ。
彼の人もうき世の人かな。美人の面ざしにつけて、それとなく妾へ、くるしき世事を云ひ行きしよと、うちつぶやけど、さるひがみたる心は持つべきものにあらず。彼の人の云ひてし事は、昔より何處にも云ふ事なりと、母なる人に叱られぬ。さるにても、如何なれど、

鼻の高きが出世の出來ぬといふならむ。むかし猿田彦の鼻が、いみじう高かりし事は、古語拾遺にもしるされ、又太閤の鼻も、紅く高かりしと聞きしがど、かうおもひめぐらすに、ふと浮び出でしは、俗に己れの能をほこる人を、鼻の高き人といふ。而して心驕りする人は、已れをのみ賢しと思ひて、人の敎も、誡めも、耳にも胸にも入れず、小成に安じて、萬事すゝまぬもの故、この鼻の高き人とは、もしや心ほこりの人をさすにあらざるか。又唇のうすき人は、口輕くよく饒舌るものなり、されど、唇のうすき人の果報拙なしとは、俗にいはゆる、口と財布は閉づるに利ありといふ心より出でしものならむ。凡て古へより云ひ傳ること には、かゝるためしの多きやう覺えぬ。袋にて鼻をかむべからず、梟の子を生むとは、こはあながち袋にて鼻をかむが惡し、と云ふにてはなく、田舍などにては、母の事を、おふくろといへど、かりにと母親を粗末にすべからず、親を粗末にするやうにては、子もまた人の子などは生れまじとなり。江の島へ夫婦連れだちて參詣すべからず、三年のうちに何れが世をさるといへるは、江の島には、北條氏の三女を祀りあるよし、神女の、もとより、人を殺すべき事はなけれど、おしなべて、女子は、嫉妬心のあるものなれど、三人もよる内には、淺ましき人のあらぬとも限らず、なるべく人は、人の怨み、そねみを受けぬやうにするが、身の德なりとなり。また繩を焚すべからずと云へり、もろこしにては太古に繩を結びて、字のかはりにせしとか、されどさやうのものは、大事にすべしとの謂なるべし。さなくど、螽斯ノ羽薨々タリ宜爾ノ子孫繩々タリ兮など、詩經にもありて、繩はつらなると云ふ形容にて、子孫などの、つらなり、むらがるは、誠にめで度ものなり。故に、總べて、女子は、周の文王の大姫の如き心を特ちて、子孫を繁昌せしめよ、繩を焚すなどは、子孫を

大事にせよとの云ひならむ。こは、わがひが心かは知らねど、よろづかく思ひとりて、身を誡めなど、益する所多からむかと、思ひ出づるまゝにかくなむ。

婦女の新年

宗村信喜

しはの山さし出の磯にむす千鳥君か御代をむ八千代とぞなく。女郎花秋の野風にうちなびき、と讀みかけしをまち玉へや雪子の君、さきのころまだ見當らね。花子ねしのもとにはは（べ）らずや。梅子とて六斗りなるがこゝにと取りいだせしをあらず、ろは君が八千代に逢ふよしもがなり。をこがましき振舞や。知らぬまゝにさしいでゝなめげなる業なし給ひそ、といましむるは姉なるべし。君が御代をむ求めかねて次々またも讀みはじめぬ。歌がるたのまとゐならむ。すべてかうやうなる優にやさしきすさびはをのこもしなむ、ね思ふまじかりける。又あら玉の年のはじめの言はきこえねまゐらすとて、はかなき文したゝむるもありぬべし。下が下ならずとも、男の劒舞といふものにかへては鞠うち、あるは遣羽子。ろも興と共につき、さては母にすがり父につきて、去年の戰のさまなど語りつ、問ひつ、埋火かきたてして、一朶の言の花をも咲かしつべし、今日の婦女子のたのしみいか斗りたらむ。まことさし出の磯にすむ千鳥、八千代となく、君が大御代の春にあひてころ、よろづのすさびもこよなう樂しけれ。されど婦女子よ君が幾秋の野風をかぞへて、けふ新玉の年を迎へしは、心一つをよすべき時近づきしなり。しはの山さしでの磯の波風、荒き浮世にこぎいでゝ、辛き世忍むも、また遠きにはあらじかし。

初卯

壚汲む翁

神世の昔思はるゝ元日すぎて、新しき年の三日は、卯の日とて、都のかたほとりなる亀井戸の妙義神社にまうづる人のひきもきらず、ふるきならはしの、むかしのまゝに殘れる、いと尊しや。さるは、開運の守り、火防、雷除の札など、うけまつりて、一身一家の安全繁昌をはからむとするに外ならざれど、祈らずとても神やまもらむとて、神をうやまふ心なく、わらぬ行どもするやからにまさることいくばくぞや。朝より空いとようはれ渡りて、わらはべのもてあそぶいかのぼりの聲、乙女子のつく羽子の音など、はや春めきたり。春水溶々として、かもめの眠いとおだやかに、



岸の柳枝めぐみて、門松の色と相映ずるも、いとをかし。妙義神社は

世に名高き龜井戸天滿宮の境内にあり、天神川筋よりやしろの前にかけて、まゆ玉、花かざし、緣喜などひさぐ商人、うちつゞきて、露店をならべ、詣づる人は、二重まはし着たる紳士もあれど、ショールかけたる女もあり、春衣はな〴〵しく粧ひて、紅顏翠袖相映ずるさま、時ならぬ花を添へぬ、太皷橋天に朝して、池の水、藍よりも青く、鈴のねとかんさびて、いのる聲いとゆかし。ゆくもあれど、かへるもあり、いたる處、人の波うちて、手にさげたるまゆ玉も、あやふげなり。今日を初卯として、二の卯もあるべく、三の卯もあるべし。かゝるほどに、臥龍梅もすぎて、飛びうめの昔もなつかしく、まうづる人もいやまして 川ゝもかすめる春の夜に、春の景色と共に、人の心とゝのふるも、また神の御めぐみなるべし。

冬夜

森　幹三郎

透間もる風身を切るやうなるに、いくたびかかきおこしゝ埋火の白う、灰がちになれるは、夜いとうふけたれどにやあらむ。讀みゐたる征淸錄も今はとてとざしつ。床はさながらくろ金をのべたらむやうなるに、たやすくねむらるべくもあらず。とかう思ひみだるゝにつけ我がいさましのますらを等が、滿洲の雪を頭におひ、渤海の風に身をさらしゝは、げにこぞの此の頃なりけりなど、しどし心は千里の外にあくがれ行く。折しもあれ。どゝ打ちあげたる時の聲ものすごく聞ゆ。あなやと思ふほどもあらせず。どら〳〵とうち出す大筒小筒の響しげく起りぬ。いよゝあやしとおもふまに、はやかたへは打ち負けにけむ、どた〳〵と音してわれさきにと、逃げ行くけはひ、いとしるくかなたにきこゆる勝時の聲耳をつらぬくらむよと思へど、ふとわれにか

へりぬ。夢か夢にあらず。現か現にあらず。あまりのいぶかしさにやをら起き出で丶、窓の戸ほそめにあけて見いだせど、さるもの丶影も見えず、たゞ犬の遠吠、夜まはりの聲に打ちあひたるいとかすかなるに、雪にやあらむ。霰にやあらむ。板戸はげしく打ちたる音の枯葉吹きしく風のねにそはりたるが、いみじうすごくきこゆるのみ。

野中氏夫妻の困難を思ふ

安藤紫光

窓の外には、冬の月いと白く氷りて、落葉の上に霜さえたる夜、あたゝかき埋火のほとりにありて新聞紙を閲す。讀みて野中氏夫婦のことに至れど、おのづから寒風肌をさし、氷雪身にせまるが如き思あり。積れる雪はときはにきえぬ富士の頂、日影てりはたゝく夏さへ猶寒しといふを、まして、霜雪のふりしきたる空の上にありて、冬の日を過さむとせし野中氏夫妻の困難、そもいかゞなりけむ。

氣象觀測の爲、宇宙の神秘を探らむが爲、氷とぢたるこゞしき岩角を、僅に靴の釘によりてふみたどり、頂の雪を削りてふきおろす嵐に、おもてをむくべくもあらぬを、凌ぎつ丶、所々の石室に恐しき闇の夜を過して、上りゆきけむ野中氏の勇氣の程よ。まして、氏の妻千代子が、かよわき身もて、猶夫と共に生死を等しくし、苦樂をも同じくせむと、心きはめて、らうたき幼子をも人にゆだねて、慕ひ上りけむ、そのけなげさ。

年々に高さます劍ケ峯の氷によりて、きゆることなく氷りつめたる雪の上に建てしは、氏か夫妻の冬ごもりすべき金城鐵壁。その所にそなへたる觀測機は、氏が一命を犧牲に供せしものなりけり。その中に下界との交通をたちて、ひたすら、世の常と異れる氣象の有さ

まに心をとゞめ、眼うつりゆく、宇宙の變化を胸に考へてありし野中氏、そをたすけて心つくせし氏の妻、ともに好一對の偉丈夫烈婦。

うすき建物の隙もりて、刀の如き風はさやるものなけれど、いとゞしく荒れ、雪に雪を重ねたる頂の寒さは、厚き衾もたへうべきにあらず。身内よりはく息はことごとに氷りて、物言はむ唇も開くにかたく、たちいづれど、見わたすかぎり只雪と雲とのみにて、暫時もそこに留りがたし。何にまれ、かにまれ、ことごとに氷らぬものなく、心さへひえわたるに、只さならぬはもゆる火のみ。かゝる中にたゆまぬ野中氏、そをたすけたる氏の妻、あはれ心よわきものゝたへうべき所かは。此の世を一萬二千尺の下に見おろしたる高峯、いかでそこの氣候の異らざるべき。あしたには肌をさす如き寒さ身を犯し、夕には千重五百重の雲足元にたゞよふ。かゝる所に住みては、いかで心地のそこなはれずあらむ。

果して野中氏は水腫病に犯されぬ。氏の妻もまた同じ病にかゝれり。折柄、山下瀧河原の村民勝又惠藏氏、有志の人々と共にさまざまの危險を犯して之を訪ひ、そのさまにおどろきて下山をすゝめたり。されど野中氏はきかざるのみならず、そのやめるさまをもらささらしめたり。かくして、猶氏は、毅然としてその目的を弛べず死ねとて、心をかへじといそしみ、氏の妻もまた、かひがひしくそをたすけたり。

あはれ、かくまでに苦しみ、かくまでにはげみて、寒風氷雪に心をみがき、氣をゆるべず、學の爲、道の爲、たふれて後やまむとおもひきはめたる氏の心、またそを共にせむといそしみたる氏の妻の心、天の下誰しの人か之に感ぜざるものあらむ。いかなる人か之にはげまされざるものあらむ。思へどかく埋火のほとりにありて、冬のさむさをも覺えず、學の業も怠りがちなる身ぞはづかしき。

きくならく、その後、中央氣象臺技師和田某氏は官命をおびてゆき、死をきはめていきさし勵しき氏をやう〳〵説きて、下山せしめたりとぞ。我は野中氏夫妻の健全になり給ひなむをのぞむ。自愛せよ、野中氏夫妻。記臆せよ、飽食暖衣の人。世にはかくばかり道にいそしむ人もありけり。

閨秀小説を讀みて

赤澤山人

萬物おしなべて、物さびしき今日この頃の空のこととて、妙なる鳥の音きかむにも、山は木枯にふきすさまれて、それとおもふ影だに見えず。艶なる花の色めでむにも、梢は葉さへ落ち散りて、其の香たづねむよしもなし。動くもはした、立つも物うき此の朝夕は、僅に火燵の側にかゞまり臥して何にもあれおもしろきものをかしきもの見まほし聞かまほしとおもふばかりぞ常の言ぐさなりける。此の時に當りて幾多令嬢たちの宵の眠もさまし、さびしき心をも慰めて、美人を天の一方に望むおもひあらしめたるは彼の閨秀小説にはあらざるか。

初この冊子の豫告されし時は、いかばかり其のさまのなつかしげに、ゆかしげなりしぞ。吾も人も近頃冬枯と共に物さびたる文界におもひもかけぬかゝる黄鳥の名乗りそめ、かゝる名香のかをりいでむとは、げに、萬緑叢中の紅一點とばかり、東天猶明けもやらぬに、曉の紅雲今か〳〵と待つにもたぐへつべかりき。見渡せば柳櫻をこきまぜて、花とも見るべく、錦ともたゞへつべき幾多當代の女流文學家ゆたかに一方の文壇に地歩を占め得る名流大家を初めとして、あるはその才筆見る限りの名腕、ひきつらなりて、肖像あり。筆蹟あり。見るから其のけはひのたふとげなる、さても文質彬々たる明治の文壇いつのまにかくばかり。才

子佳人を養ひ得たると先うれしく、二度三たびうちかへし、くりひろげて、さて、其の本文をうかゞひはじめつ。

讀みもて行くに流石は當代になだゝる人々の物したる物とて、をかしとも、おもしろしとも感ぜられて、二篇三篇ばかりはいきをもつかで讀みつくしつ。猶讀み行きて「黒眼鏡」「白はら」などいふを見るに至りて、何となく、頭かたぶき、眠もよほして、得も堪へぬを、このまゝにさしおかむもさすがに心なきことゝおぼえたれど、强ひて、うち念じつゝ、睡眼こすりながら、とにもかくにもとて、讀むことは讀みつ。

讀み畢りて、一考すれど、予の心中言ふべからざる感をればねたりき。あはれ飽くまで善つくし、美盡したる此の好冊子は、果してねりぬきの名手の揃ひて、女流文學界を代表し得たるか。果して世の囑望したるばかり讀者の心を滿足せしめたるか。予は幾多の讀者が見ぬこそ花なれとの嘆を發するなからむことを祈りて止まざるなり。

予は徒に詭辯を弄して事を議せんとするものにあらず。しかも玆に筆を舞はして呶々するは、唯一片の婆言、女鑑愛讀の諸孃に向ひて聊注意を促さんと欲してのみ。

今更いふまでもなけれど、文章を草するに當りて、男子のと女子のとは勢其の趣を異にせざるべからず。否固より異なるべき自然の理法ありて存するなり。婉筆いかに花のごとくなるも、麗腕如何に水の如くなるも、はた、その筆力は千仭の絶壁天外にそびゆるごとき勢あるも、其の手腕は滄洋たる大海の津涯なきが如き妙あるも、男子の腕と女子の筆とは自そのけぢめなかるべからず。否固より、其のけぢめをたてざるべからざるなり。男子には男子の特質あらむ。女子には女子の本性あらむ。男子の思ひ及ばざる所に、女子の活眼能

くろの眞相を看破し得るごともあるべく、女子の手腕のとゞかざる所に、男子の眼光能く其の實際を穿つこともあるべし。されど男子は其の方面をたどりて、益其の長所をふるひ、女子は又其の方向を取りて、益其の妙所を極め、以ちて吾が明治文壇をして一層其の美を啓發せしめざるべからず。彼の女流文學者は、之を以ちて心となすもの果して何人かある。

又小説と名のつきたるものに戀愛のともなふは目下普通の事なるが如し。小説といへど果して戀愛のともなはざるべからざるかは、玆にいふべき限りにあらず。然してこの戀愛を寫すに非凡の筆を以ちて之を着すれど、隱微にしていふべからざる趣味の存するものなれども、若凡庸の筆を以て之を抹すれど其の痴情狂體現はに暴露せられて、實に言ふに忍びざる醜態を醸すことあるなり。彼の女流文學者は能くこの醜態を免るゝを得て、一方に勇飛することを得るもの果して何人かある。

予は世の批評家の如く、其の結構の工拙を云はじ、其の着想の美醜を是非するものにあらず。從ひて其の戀愛か小説上幾何の價値あるかを知らざるなり。然して全篇を通覽するに、其の過半 戀愛を解き男女の狂体を畫きたるものにあらざるはなし。男女の痴情にあらずは果して諸女史の筆に載すべきもののなきか。

這般の事態は有數の作者にありてすら、遂に大人君子の見るに忍びざる邊に脱落し、人にして嘔吐を催さしむること比々として皆然らざるはなし。況んや女流の身にありてはたとひ其の筆の神に通して、其の力の妙を極むといふとも斯の如き叙事は似つかはしくもあらぬものなるを詔として辱しともれもはず。好みて筆するに至りては、誰か彈指せざるものあらむや。

然らど目下にありて女流文學者の筆を着すべき最大の急務は何なるべき曰はく本邦特得の女子の美德を稱道

して、過去にありては專之を發揮し、將來にありては益之を發達せしむるこそ最適當なる任務なるべけれ。

吾が國女流の諸外國に卓越せることは今更いふべくもあらず。中古美人の風姿態度何ぞ艶美高尙なる。古來聞ゑたる美女節婦何ぞ蕭々繽々たる。腰細のすがる少女のあるはきけど、洋服とかいひて蜂の尾の如き姿を見ず。柔順之事とする婦人のあるは知れど、女尊とかいひて夫を腰に敷き据ゑたる例をきかず。あはれ。この女德、あはれ。この美風、吾か國には、斯くまでの女德、斯くまでの美風の備れるものを、女流社會一人の之を稱道するものなくして、女子の身にあられもなき痴話をならぶるにあらざれど、さもかしこげに翻譯とかいへるを物して、束髮孃を描寫せんと務るに至りては予は大に女流文學者の其の任務を誤りたるを哀まずんばあらず。

いはずもがなのことなれど、猶閨秀小說を觀て笑止に堪へざるは卷頭かかげられたる肖像にこそ。さても時世異なれど斯くも其の事の異なるものにや。昔は玉簾深くかくれ、深窓固くとざして同胞猶且相對座するを耻ぢたりと聞くに、今は玉顏惜しげもなく、これ見よがしにさしいだして得々たるとは何たる狂体ぞ。殊に「白むら」といふを物したる女史の如きは、其の畫きたる小說、さながらの肖像と相映して、一しほ其の光彩の陸離たるをればゆるもをかしとやいはむ。さはれ余は女史の〇〇の〇〇然たらざらむことを希ふと共に女史の性行の〇〇然たらざらむことを祈るなり。女史の心中には〇〇を以ちていかにも當世女流の卓越せるもの、婦人社會の摸範たるもの、實に作者の心を用ゐたる理想の佳人として畫きいだされたるげなれど、予は斯の如き女性は實に唾もはきたき心地するなり。尤此の肖像をかゝげたるは書肆の顧客を引かむ爲の手段

にして、女史たちのあづかり知る所にはあるまじけれど、似つかはしからぬ所は何所までも似つかはしからぬをいかにせん。

書き終りて、予は實に大なる罪を犯したるが如き心地す。諸女史たちは此の花をつゞり、錦を織り出すまでにはいかばかりやさしき胸を痛められけむ。いかばかり熱き血をそゝがれけむ。さばかり苦心慘憺の名篇佳什をさも事もなげに抹殺し去らむと試みたれどなり。寃なりとおもはるゝ方もあらむ。酷なりとつぶやく方もあらむ。はた痴人の夢と見なしてうちおく方もあるべし。しかり。予は通篇悉く彈指すべきものなりとはいはず。全篇擧げて唾棄すべきものなりともいはず。「刷毛彩色」のごとき「手箱の内」のごとき其の着筆の如何はともあれ。讀むも害なく、讀まぬも損なき可憐のものとして寧筆を執りし勇氣を稱するものなり。又各長所に向ひて歩を移すにいそがはしき今日、英

語にもあき、獨語にもあきその道に、精通せられたる上は、其の進路を阻碍して翻譯をやめよとはいはじ。又其の性の好む所に執してかくなりかたまりたる以上は、今はた戀愛を說くなどはいふまじ。唯希ふ所は女鑑愛讀者中、幾多の才女に向ひて卑俗のものはさけて讀み給ひそ、尾陋のことは好みて綴り給ひそといへど足れるのみ。

時雨（その二）

白魚女史

ふりしきりたる時雨の空の、晴れわたりて、またも朝日の影の、白うさしのぼれるを見るにつけても、そゞろに定めなき世のさまのおもひ出され、ふみ子の胸は、うき雲のみいやふたがりて、袖の時雨の一しきり降りまさりぬ。やよ姉上さま、如何なされし、父上が御出勤がけに話すことのありとて、待せ玉ひぬとて、妹よ

し野がまたも呼ぶ聲するに、げにやおくれたり、かばかりに心よわくては、母さまに底のこゝろをくまれむ、おろかなりきとつぶやきつゝ、涙を收めて、妹の先に立ちゆくも、心はとかくにおくれがちなり。

文は未だにや、何をなし居るならむ、いつになく親をまたする事やと、母の聲の坐敷よりもるゝに、文子は今更にどうきのいとゞ高まりて、思はずも立ちどまりしが、やゝ髪を撫で、身の廻りとりつくろふ樣して、そつと下着の袖に涙を包む折りしも、よし野は、かひがひしく、襖間押わけて、いざ〳〵姉上樣、早うと云ひつゝ、己れは諸共にも入らで、部屋へとひき返しぬ。文子は、やをらふすまを元のごとく押し立てゝ、いとう御またせ參らせし事よ、許るさせ給ひてよ、此夜の長きにもわかで、いぎたなうもね過し侍りてといふ聲のふるへを、せきにまぎらせ、さるにても光陰のはやき事は、祖父さまの此の世を去り給ひしも、昨日とのみ思ひ居りしに、いつか百日も今日は一日越えぬ。げにまだ秋のはじめとのみ思ひ居り候ひしに、昨日今日の村時雨、おどろけど、はや木の葉さへふりしきてと、時雨にいひよせて、やゝ安く袖をしぼりぬ。

何處よりあめがもりたるぞ、屋のやぶれでもありてかと、父にとひなじられては、中々に、耻しさの、元にもまさりて、答へん道もなく、さしうつむく顔を、母なる人のさしのぞきて、聲もやさしう。あれほど御ひさうなされし、祖父さまに、おくれしなれど、その袖のぬれ、とがむるにはあらねど、さやうにやつれの見ゆるやうにては、祖父さまも草葉の陰より、如何ばかり御心をいため給ふらむ。まして此母の心のくるしさはいかばかりぞや、文子よ、なき人をおもふも、世にある人を忘れでよと、子を思ふふかきこゝろよりのくり言を聞くにつけ、おもふにつけ、ふみ子の心はいとゞ苦るしう、露とも消えまほしき思ひ。心よわやと、





己れと我をはりつむれど、心にもまかせぬ涙は、はやせきかねて、ばら〳〵と疊の上にこぼるゝに。嗚呼云ひがひなき愚痴の女子や、さるものを深見貞三の妻にとは、似づかはしからねど、之もなにしならむ、遠からず深見方へ嫁せんに、左様心得よと、父の仰の必ずさあらむと、文子はかねて思ひし事なれど、今更に驚きもせざれど、何といひていなまんかと、思案にくれて、とみに言の葉浮び出でぬに、最早用事はそれぎりぞ、早う立ちて萬事自らとり揃へよ。其方もよう差圖してと、見かへらるゝより先きに、母ははや簞笥より、着物小切等とり出でゝ、先づあり合するものよりとて持ち來たりさま、之を何に、彼をかにせよ、やさしきものは吉野にも手傳せよと、いろ〳〵とする母のさまを見るにつけ、文子はいよ〳〵きえ入りて、言の葉のます〳〵つまるを、かくてはとおもひ返し、御兩親の御仰せ背き奉るは、誠にゆゝしう侍れど、思ふ事ありて、深見さまへはと、かきくもる言葉も終らぬに。まださることを云ふや、今日は母のみの云ふにはあらぬぞ、父君のの給ふなり、若きうちは誰も耻しうて、心すゝまぬ者なれど、さりとて、いつまでも、ひとりにては居られぬ者ぞ、十八にもなりて、夫程の道理は知るべき筈なるに。嫁くはいとはねど、深見方へ行くはいとふなりとは、何事ぞ。深見樣程のものをと、おどろく母よりは、父は早もいらだちて、何をいふ文、父母の定めたる聟、まして深見はどのもの、其方には過分にてあるもの、何が不承知ぞ、深見がいやで誰れがよきぞ、不埒者め、いま一言云はゞ、其分にてはおかぬぞ、口惜しき奴かなと、きつとにらまへられ。げに、父母の思召に戻るは、かへす〴〵も不孝には侍れど、妾は他に過世のある事を知りて、何となう其人の戀しうてと、さつと顏をそむる、娘の顏をうち守りたる母は、何ぞ、深見の君の外にいかなる過世ある人のあ

るぞ。さるべき人のありしならば、母のかねて云ひにし折り、告げもせばよけんにと、娘にあまき母親の、心をくめばくむほど、わきかへる涙を、文子はじつとせきとめて、のう父上、願ひ參らす、どうぞ自らを。何と云ふぞ、大それたる口惜しき奴め、最早父の子にはあらず、何處へなりとも行きて、勝手に、自由に、誰とでも、結婚せよ、不埒ものめ。さる不義の名をおはじと思ひて願ふと。それがもはや不義ではなきか、親のゆるす人に嫁かぬと云ふが、もはや不義ぞ。さる事をの玉はで、江口方へ嫁がせくれと、江口とは千太郎の事かと、ふと驚く父親よりは、母は一入にあきれて、文子、戯れを云ふにも程こそあれ、千太郎主の、人並にあらぬといふことは、其方も幼きより知りてなるを。何戯むれなど云はじと。さらば狂氣ぞ、心をしづめよ。狂氣にもあらぬ、彼人とはゆかりあるやうにて戀しきぞ。何たるゆかりぞ、色ぞ、彼の人は、祖父樣のいと親しかりし友のお孫のみ、何の其方ゆかりのあるべき、いまし〳〵しや。幾夜もゆかりある夢を見しと。おろかや、夢は思ひ寐に見るもの、其方は日來物事に、あまりなさけふかき故、千太郎殿の愚なるを、あはれにおもふあまりに、さる夢を見つゞくるなり。ゆかりや過世のあるものならば、親にこそ知らるべきに。思ひても、見よ、深見主の事を。其方の十の時より、ふかくも思ぼしかけられて、大學を卒業されても、御母が彼を之をとゑらび給ひしよめを、研究のすみての後にとて、延ばしのみ居られしは、其方がまだ十二三のいふ甲斐なかりし故ぞ。めで度く博士にもならせ給ひて、いざ御身も十六歳、未だ若くはあれど、萬事は此方にて、そてまむにと云はれし時、祖父さまが何との玉ふとも、嫁がせだにすれば、かゝるものゝけなどに、とりも付かれざりしを、御祖父樣が、ごひろうのあまりに、我が命のあるほどは、文は我身を放なさ

じとのかたくな。先方にては、さらば祖父様諸共にもと、仰せられしを。此處にて死なむと思ひて、建築したる此住居、如何なることありても、此處ははなれじと、かさね〴〵のかたくな。まだ年も若し、老人にさからはぬがよしと、父上の御言葉に、さりとは思ひたれば、是非なく其由云ひて、一度はことわりに、深見主の御心の深さ、御身を置きてあだし人は、例へ此まゝひとりにて朽るともとて、今日までもひとり過ぐされし御心を。有難くは思はぬか、親ながらもさかしと思ふ御身、日來母に背きし事なく、物の哀れ知りたるに、必ず何かのおもひ違ひにてありしならむと、涙と共に說き諭す母の言葉に、文子はたえ入りて、暫くは聲も出でざりしが、過世なりと思へば、如何やうに人の云ふとも、妾にはさのみ愚にもおもはれず、何となう戀しうて、得も絕えられぬ心地、のう父上、一生のみかは、三世の願ひ、何うぞ許るし玉ひて江口方へと拜み入るに、文子汝は、この母を、あくまで歎きの淵に沈ますするにやと、はや眼も血走るを、見る文子は、いとゞ堪へ難く、あはれゆるしてよ母さま、どうぞ祖父様、母さまを陰ながらなだめ玉ひてよ、御心の狂ひでも遊ばさば何とせむ、のう祖父様、母様を守りてよと、心のうちにねんじつゝ。父上様どうぞと、猶も手を合すを、默然たる父親は、つと立ち上りて、云はせて置けば氣隨な事ばかり、もう堪忍の袋も破れしぞとて、襟髮を握み、藏のうちへひつさげ入りて、錠下ろし、しばらくは出でこぬに、母も續きて駈け來りしが、外にたゞずみて、我夫許してよ、日來あまりに賢かりしゆゑ、庭の敎をよくもつゝしまざりし妾が罪、今一度自らがさとし侍らむ、必ず〳〵御短慮をな起し玉ひそ、御身ひとりの子にはあらず、のうわが夫、此處明けて。文子よき程に、心をしづめて、父上に御詫び申せ、のう〳〵と、母のさけび聲に驚きて、吉野、

二郎等は、學校への出がけ、かばむ提げたるまゝ走り來りて、諸共に泣きさけぶを、何をさわぎ居るぞ、汝等は早う學校へ行けと云ふ、父の後に、文子のしほしほたる樣、見るより母親はまづ涙にくれぬ。



曙梅　東久世通禧

ともし火もほのかに殘る明がたの
窓ゆかしくもにほふうめかな

祝　鍋島直大

國のため君のためにとみなひとの
盡すこゝろぞたからなりける

鷄　高崎正風

久かたの天津うらよりわくる夜を
いかにしりてかとりの鳴らん

綠竹年久　竹屋光昭

あたらしきとしを重ねて呉たけの
かはらぬ色もふりせざるらん

雪中鶯聲　前田利鬯

雪ふかきかた山ざとはうぐひすの
聲よりほかにはるなかりけり

試筆　諏訪忠元

あきらけきはつ日の影に打むかふ
こゝろもけふはくもらざり鳧

新年松　仝

としごとに立とはすれどかど松の
みどりは更にあらたまりみゆ

寄山祝　宮地嚴夫

あし引の山のくまにもみめぐみの
露にもれたるひとぐさぞなき

天晴有鶴聲　阪正臣

わしたづのまふ大空はたかけれど
　聲もすがたもさやけかりけり

萬世橋　三浦千春

動きなく見えこそ渡れめがねばし
　よろづ世かけて誰わたしけむ

寄山祝　林甕臣

地は天に倒しまならむ世なりとも
　動きあらめやもふじの高峰は

仝

年たちていよ／＼寒くなりにけり
　いよ／＼冬になりにけるかな

新年望山　三輪義方

うら／＼とのぼる初日を打あふぎ
　顧りみすれどふじもはれたり

袈裟　仝

思ひやるこゝろも寒しさみなへし
　さかりの花にしもふりしよを

新年　菊池眞澄

あら玉のとし立今朝のうれしさは
　老もわかきもかはらざりけり

夕雪　仝

夕まぐれねぐらに歸るにはとりの
　道まどふまでふれるしらゆき

正宗の故宅を過て　龜谷行

燒太刀の霜のひかりはきえはてゝ
　のこりしあとの寒くもある哉

折にふれたる　永石德文

天ぐものうへにも人の見るばかり
　たつべきものはいさを也けり

森鶯　鍋島榮子

わすもまたきてこそ聞め梅のはな

にほへる森にうくひすのなく

梅薫枕　松平建子

まだ風のまくらにさゆる閨の戸を
はるになしても匂ふうめかな

新年氷　栁原愛子

あらためて汲し筒井のこほれみづ
こぼれしまゝにこほりける哉

時計　千種任子

なにごともたゆみなき世を時計る
うつはゞかりと思ひけるかな

年内梅花　園祥子

何ごとも進みゆく世におくれじと
としのうちより梅のさくらん

新年待鶯　税所敦子

あら玉のとしはたてども我やどは
うぐひすならでまつ人ぞなき

新年日　姉小路良子

あし鶴もたち舞ぞかりあらたまの
年のはつ日のかげぞのどけき

新年鶴　小池道子

あら玉のとしたつ空にいづる日の
影にむかひてたづなきわたる

獨聞鶯　北島以登子

いつよりも嬉しかりけりひとりゐて
さびしき窓のうぐひすのこゑ

雪中鶯　保科寧子

うぐひすの聲ぞ聞ゆるゆきふりて
たわみはてたる竹のはやしに

隣家鶯　日野西廣子

さしなみの隣にきなくうぐひすを
我やどゝのみおもひけるかな

松上鶯　鶴久子

野づかさの松にきて鳴うぐひすに
わかなもけふはつまれざり鳬

寄國祝　山本富士子

神代より世々つたへきて久かたの
天津日つぎをあふぐくにかな

梅　田邊和氣子

一年のはなをかぞふるをよびにも
まづ梅をこそ折りはじめけれ

寄山祝　仝

よろづ代を岩根にこめてもゝ重山
ゆるがぬくにと神やなしけん

新年梅　安東菊子

あら玉の年のはじめに咲き初めて
春まちがほのうめのはつはな

國　師岡すか子

あめつちのろきへのきはみ天皇の
かはらぬ國のあらば社あらめ

よき夢を見たる折　仝

よき夢をおもはず見たり思ふこと
うつゝにかなふ印しともがな

新年游　仝

のどかにもたちかはりけり新しき
年のはじめのれきつしらなみ

元旦　林甕臣

こわだかに、門叩きのゝしる。驚き覺めて、「これよ」。と呼べど、塾生ども、起き出でゝ、やがて持てく。取りて見れど、端書なりけり。一枚は、「謹賀新年」と在り。一枚は、「恭しく新年を賀す」とあり。一枚は、「新しき年をことほぐ」とあり。一枚は「新年を賀します」とあり。一枚は、「よい年であります」とあり。いま一枚は、「改年のよごと申す」とあり。なほ一枚は、「あたらしき年をほぐ」とあり。また一枚は、「あたらしき年を

ことはぎまつる」とあり。
あゝ、さま〴〵なるかな。年始狀。年始狀。あゝうるさしな。
年始狀。いまだ國文は、一定せぬ。と見ゆ。

閉ぢはてゝ松をも立てぬ葎生の
　枯れ生の門も年は來にけり
世を捨てゝうき世の外にすみぬれど
　春は春なりうぐひすのこゑ
心からあらたまれぞやけふといへど
　見るものごとにめづらしげなる
なれ〳〵て年のはじめのけふとしも
　れもはねどこゝろあらたまりぬる
また一つわが身のとしもよるけふを
　わかゞへるものとれもひけるかな
新しく年あらたまるとし〴〵に
　舊りぬるものはわが身なりけり

雜報

●元始祭　去し三日は恒例のことゝて、午前十時、天皇陛下神殿に出御まし〳〵て、御親祭あらせたまへり。かくて后太、后宮兩陛下、皇太子殿下は、御代拜なりきと承りぬ。在京の親王、大臣、文武親勅奏任官、麝香、錦鷄兩間祇候有爵、有位、有勳者及び神佛各宗派管長、門跡寺院住職等は、何れも拜禮を仰付られたり。

●御歌會始　去し十八日宮中にて、御もよほしあらせられたり。さて

寄山祝

御製

天の下賑はふ世こそ樂しけれ
　山のれくまてみちのひらけて

皇后宮御歌

あまつ日の光をうけて位やま
身のほと〳〵にのほる御代かな

●詠進の歌數　さてあらゆる官民よりたてまつれる歌かずは、一萬首ぞかりあり、その內にて撰歌にあづかりたる歌は、この日叡聞に達し奉りしが、其の他のは、やがて乙夜の覽にさゝげ奉るべしとなり。

●皇太子殿下　さいつころより御病後御保養にとて、相州三浦郡なる葉山の御殿におはしましたまふ。さて去し十七日には、御運動にとて、同じ郡なる逗子にわたらせられ、福原有信氏の別邸に、たち寄らせたまひて、しばし御休憩あらせたまひ、やがて庭前の濱邊にて、引網を御遊覽あらせられたり。この折いと多に海幸ありしかど、いと御滿足の御けしきにておはしたりとぞ、かくてこん二十二日には葉山をぞ立せたまひて、靜岡縣下なる沼津の御殿にうつらせたまふべしとなり。

●故有栖川宮殿下の一週年祭　去し十五日は、故有栖川熾仁親王殿下の、一週年祭なりしかど、午前十時霞ケ關の御邸にて御靈祭を、午後二時には、小石川なる豐島岡にて、御墓祭をおこなはせられたり。宮中よりは、特に追賞の御沙汰もあり且つ御代拜を差遣はされたり。又在京の諸親王、各大臣、大本營附將校、宮內省勅奏任官等は、孰れも御邸或は、御墓地へ參拜せりといふ。きのふとのみおもひしに、いまは、一年のむかしとなりぬ。

●追賞　故有栖川宮殿下の勳績を追賞あらせられ、一週年祭の日、御沙汰あらせられたり。

明治二十七八年の戰役卿參謀總長の重職に居り宏猷を贊畫して機宜を失はず六師を派して彼の山河を席卷し遂に彼をして和を乞ふに至らしむ然るに天年を假さず卿をして其全局を見ることを得せしめず誠

に歎惜するに勝たり今や其一年祭に當り更に其勲績を追賞し金幣を以つて之れを弔慰す

●祭粢料御下賜　軍艦廣丙が昨年十二月、澎湖島近海にて、難破の節溺死したる段憫然に思召され、聖上皇后兩陛下より祭粢料として、笹村上等兵曹以下、下士十名へ、各金十圓宛、一等水兵以下卒二十五名へ、各金五圓宛、傭夫二名へ、各金三圓宛下賜相成候に付き、各遺族へ可然傳達有之度、との書面を添へ、土方宮内大臣より、西郷海軍大臣へ通牒ありたりといふ。

●野見宿禰の墳墓　出雲の千家尊福男の祖先は、野見宿禰なりと云ひ傳ふれど、豫てより其墳墓所在地の探索に心を勞せし効空しからず、兵庫縣下揖西郡、龍野町、字臺山と稱する地にて、其墳墓を發見せり。元來宿禰が播磨に歿したりとの事は、千家々にて代々口傳せるのみか、播磨風土記にも、

揖保郡日下部里（因人姓爲名）土中中立龍所以號立野者昔土師弩美宿禰往來此出雲日下部里乃得病死爾時出雲國人來到連立人衆運轉上川礫作墓山故號立野即號其墓地爲出雲墓

とあり。これに據れば、宿禰は立野に葬られしものにて、其會葬人、多く野に立ちしを以て、こゝを立野とは名づけたるものならんか、此の立野と今の龍野とは文字相同じからざるも、寶延寶暦のころ、徳川武鑑に、立野城主、寛文十一年より脇阪氏代々領す云々、とあり。無論立野と龍野とは、おなじ地なればとて、千家家にては、家從をやりて、その附近を踏査せしめたるに、その臺山と云へる處に、俗に出雲墓と呼ぶあり、此地は往古揖東郡揖崎佐野より北、龍野村字御坂の山路を越ゆ、兩見坂より赤穂郡上郡村に出づる道路に沿へる地にて、今は官有となりて、墳墓は荊棘中に纔に欠損せる石碑のあるのみにて、苔深くして文字讀むべからざるも、先年試に其近傍を掘りし際、古劍古瓶

を發見したれど、愈々其事實たるを確めたり。されど同家にては、この建碑の事を計畫せるも、同所は官有地なるが故に、こたび建碑に要する官地、拂下を其筋に願ひ出でたりとぞ。

●戰利物品　此度陸軍省より、各府縣へ配附することとなりし、戰利品の內、愛知縣へは、當地砲兵第二方面より回送したり。其種類は野砲、小銃、地雷火、鎗、刀劍、旗、彈丸、彈藥箱外雜品十餘種なり。同縣にては、この戰利品を、熱田神宮及び各國幣社、各學校博物館等へ紀念の爲め配附せんとすといふ。

●東京圖書館年報　此度東京圖書館より、文部省へ報告したる、昨二十八年度、年報なるものは、吾國文學の發達に就きて、必要なる統計なり。そは本館に於る昨二十八年中に增加せし圖書幷に同年末現在數は左の如し。ろは

明治廿七年末現在數	和漢書	二六、五七八冊
	洋書	三〇、一四〇
同　廿八年中增加數	和	一四、一九九
	洋	一、三〇四
同　廿八年末現在數	和	一二〇、七七七
	洋	三一、四四四

右增加の和漢書は、大半內務省の交附に係り、(即はち全國新刊書の納本と爲りたる者各一部を受領したり)其他は本館の購求官民の寄贈に係る。其洋書は本館に於て、直に歐米各國より、其新刊に係り有益の圖書を購求したる者を最とし、其他は內務省交付及內外官民の寄贈に係る。此外複本、缺本、其他雜種、卑近の書にして公衆の閱覽に供するに足らざる者、亦十數萬冊あり。皆庫中に整頓し、特に其閱覽を望む者あれど、臨時之を許す。又明治廿八年中開、館日數三百三十六日間の圖書閱覽人員貸付圖書の數は左の如し。

尋常閱覽人	六二、八五〇人
特別閱覽人	七、〇六三人
合計	六九、九一三人

一日平均　二、〇八一人

貸付圖書數　四二四、五三七冊

一日平均　一、二六三五冊

右閲覧人員貸付圖書數を以て、前年に比すれば、閲覧人員は八百四十五人を減じたれども、貸付圖書數は、二萬二千五百八十冊を増加せり。今ま其貸付圖書の種類并に各類百分比例より擧れば、左表の如し。

	和漢書	洋書	合計	百分比例
第一門神書及宗教	九、二八五	三一七	九、六〇二	二、三
第二門哲學教育	二四、六三一	二、二七〇	二六、九〇一	六、三
第三門文學語學	七二、九二六	六、六七九	七九、六〇五	一八、八
第四門歴史傳記地理紀行	八七、二六〇	四、五〇八	九一、七七二	二一、六
第五門政治法律經濟社會統計	五二、四九二	二、九三四	五五、四二六	一三、二
第六門數學理學醫學	七七、六六九	四、三九四	八二、〇六三	一九、三
第七門工學兵事美術產業	四五、一五四	三、〇二七	四八、一八一	一一、三
第八門類書叢書雜書	二八、二一九	二、七六八	三〇、九八九	七、三
合計	三九七、二四〇	二六、八七九	四二四、五三七	一〇〇、〇
一日平均	一、一八三	八〇	一、二六五	三、五
前年比較増	一、二五二	六九	二二、五八〇	

此數は字書の數を以て、藏書の數に配當すれば、毎一冊二回七分強、繙閲せられたる割合に當り更に之を以て本館廿八年度、政府支出金に配當すれば、一冊繙閲料僅かに金一錢七厘餘となる、割合なりといふ。

●子爵福羽美靜君の教育談話　なりといふを吉木竹次郎氏が速記せしなりとて、よせられたれば、そのまゝを、

教育の事は、明治維新の一大事なりとして、當路の人之を勉むること孜々たり、今明治二十八年を終つて、二十九年に移り、既に三十年に垂んとせり。其教育の事業、大小擧りたることは擧りたり。然れども豫て思ひしよりは、擧ること遅し。其の擧ることの遅き所以は、種々ありし事なりと雖も、先づ其の

一二を以て述べんとす。教育は大事なりとして、教育の大旨、遂に　天皇陛下の　明勅を出し給ふに至る。其の　勅旨は至れり盡せり。實に以て結搆至極なり。然るに其の　勅語をして、今日實際に施す所を見れば、實に殘念なる事あり。其の次第は、勅語中に忠とあり、孝とある、其の他人事の大切なる事を述べ給へり。教員之を執つて子弟に施す。其の施さんとする時、先づ教員は如何なる事を以て施すか。之を撿せざれば叶はず。今現に見る所に於ては、忠とある文字に就ては、直ちに忠を心懸よ、忠を盡せよと云ふより他なし。是れ甚だ遺憾なる說き方なり。忠と云ひ孝と稱するは、其の事の符帖なり、其の解し方甚だ廣し、又狹くもすれば狹くもなる事なり。日本の大古事の體裁備はらざりし事にはありながら、此の忠孝の忠は實に確乎たるものなりしなり。忠と云へば、至尊に對して盡す心と國家に對するの事より、其の他はなし。人々身を寄せたる主とする所の人はあるべし。是れは即ち我恩人なり、敬すべき人なり。然れども其れへ對するの心は、忠を以て對せず。恩に報ゆるの信義を以て對したるものなり。是れ忠は國君と國家へ對するの他は用ゐざりしものなり。其れを中古よりは身をよせたる人の上に對して、此の忠の字を當て、遂に武家の君臣は、此の忠の字を濫用したり。其亂世より始めて、治世となりしと雖も、其の藩主々々へ對して忠の字を用ゐたり。是れは有るまじきことなり。唯々　至尊即ち國君へ對すべきものなりと忠を大なる所に引返して、其の穿鑿を爲し、其の大なる所以を先づ心に占めたる教員が、之を子弟に授けざれば、叶はず、然るに俗にいふ早合點を以て、之を子弟に授くるが如き事あり。又凡そ孝と稱するものは、父母に對して盡すべき事の大なることなり。其の父母に對して盡

さんとするには、已れ先づ身を全くし、其の全くする計りにては足らず。業を勉め實徳を備へて、名譽を高くし、遂に已れが身の重さを以て、父母に盡すの場合を實にせざれば叶はず。猶父母の心に欲する事を見よ、其欲する所の第一は、其子孫生育の宜しきをはじめとし、つゞきて各々其の業を高くするを見んことを欲するなり。故にこの身々々この業につきて、これを確實にし、父母の心を悦ばしめざれば叶はず。全く人の人たる道を盡すを以て、即ち父母へ對するの孝と思ふべし。これを中古は孝の道を小にして、先づ身體髮膚を毀傷せざるを、主として說き、身を立て丶道を行ふ杯といふ事を、人々に爲さしめては、武家政治に對しては、治安を妨害するが如き感を生じて、人の業を小にし、孝の道を狹ばめて、其れを習慣となしたるものなり。其の習慣の忠孝を世間にては通用の忠孝なりとして、これを辨別せざるあり。まづ明治の維新となりて、忠孝の大穿鑿を究めざれば叶はず、其の穿鑿を究めずして、忠の字、孝の字をとく時は、子弟の學ぶ輩も識らず知らず、眞實の大忠孝は學はざるものなり。其れが故に現今明治の三十年來りて、明治の教育を二十年前後受けたる輩、現に事を爲すの時と爲り乍ら、其の現今の人の思想は、尙ほ小にして大事を心に辨へざるもの丶如し。是れ即ち教育に殘念と稱するものなり。恐らくは　勅語に含蓄したる廣大なる　聖念をば玩味せずして、已れが自ら習慣より識得したる忠孝を思ひ、尙は人と人と交るは場合、或は人を恵むの場合、又恩に報ゆるの場合等、一々小にして廣大無邊なる教育の恭き事をば人に傳へざるもの丶如し。故に世は其の廣大を知らざるもの丶如し。今日の人年齢の度に從ひて、各々其の事業を勵むの時となり。又場合に依りては、一村落の事業より、國家

の事業に至るまでの職員となり。衆人を代表するの場合ともなるべし。其の衆人を代表する人等が寄り**集りて、彼の小量なる了簡を以て、事務の正否を論**じ、其の決議其の度必ず大なるに至らざる時は、是れ即ち根ざす所は敎育の如何と云はざれど叶はず。是れ余が殘念とする所なり。請ふ看よ維新の際、諸藩俊秀を出して國家の用を辨じたり。其の人今老いたりと雖も、之に代はるの俊秀其の度合何れ計り高くなりたるや。其の分枝たるの事業やゝ進みたるが如しと雖も、舊弊を退け、又新弊を生ぜざるが如き、英雄何れにありや、見ね難きが如し。尙は國家の軍事が世界に光を放したるが如き景況は喜ぶべしと雖も、又日本の重きを增すの高度を執らざれど現今の名譽は却て一種の遺憾を生ずる事あるべし。吳れぐ\にも敎育の事に就ては、忠孝、或は仁義、或は心の度量等、新たに穿鑿を究め、其の穿鑿の宜しき所を得て、勅語の廣大を考へ、之を子弟に施すの肝要なることを思ふべし。是れ敎育中の一事なから、**輕からざる事なれど、此に之を述ぶ。**

●臺灣敎員の撰定　臺灣島、敎育上、敎員及び土語研究生募集の方なりといふをきけど水野民政局長等歸京の後種々協議を遂げたる末、愈々三十餘名の敎員を文部省にて撰定の上、派遣することに決し、撰定の方法は履歴等に依りて試驗を行ひ、採用するが如き事は、せずして、現在奉職敎員中より志望者を撰び、地方官の證明を得て、其筋より任用すべしと云ふ。

●女子高等師範學校入學試驗　去る十五日より東京府廳內議事堂樓上にて開き、三日間引き續き試驗して、十七日に終れりといふ學科は國語、漢文、歷史、算術等にして受驗者は合計二十名なり。

●親和女學　神戶の親和女學校は、國家的敎育を施し、貞正なる淑女を養生せんとて校主友國はる子の專

心經營せられしが、こたび同地下山手通、七丁目に校舍を新築し、去十二日其開校式を擧げたり。從來兵庫縣には、完全なる女學校なく、偶之れあるも、皆外敎的性質を帶びて、純然國家的敎育を施すものは、獨り此黌あるのみなりと云ふ。よろこぶべきことなり。

●百二歲の老翁　宮城縣、仙臺市東二番町百六十二番地にすめる岡村正則と云へる人は、寛政六年、六月十二日の生れにして本年百二歲の高齡を重ねけるが、身體なほ矍鑠として、一服の藥も服みたることなしといふ。明治二十一年、家產を孫に讓りて、飄然廻國の途に上り、今日に至る迄、八ッ年間、諸所を遍歷したれども、曾て病に冒されしこともなし。尙は今後七年間は、廻國をなす見込なりと語り居りぬ。舊臘には西京御室仁和寺の參詣を思ひ立ちて、東京に出で來りしが、身には黑衣をつけ、頭には檜木笠を頂き、鬚髯銀絲の如く生ひたれども、顏色麗はしくして、百餘歲のものとは見ゑず、手に「百二歲翁岡村正則」と記したる小旗を携へ、背に笈を負ひ、其の行步の健やかなること、見る人感ぜざるはなかりしと云ふ。

●九十歲以上の媼　芝區通り新町、九番地に住める藤代宰次郎氏の母富女は、今年は九十二歲の高齡なるも、其の壯健なる事若き者も及ばず、宰次郎氏が留守勝ちなる家を守り　嫁と倶に、何くれと、萬事に心をつけ、永き間を一日も怠らざりしかど、藤代氏今は家もゆたかになりたるに是れ偏に老母の賜物なりと、常に人にも語りけり、さて是れに劣らぬ健氣の老人は、秋田縣、秋田市、龜野町外張南新町、九番地宮藤淸江氏の祖母なり。名を留女と云ひて、本年九十九歲にして、長女七十六年、次女七十一年、三女六十八年の三人も打揃ひて、健かなるが、二女三女は他へ嫁ぎ居り、長女と云ふが即ち淸江氏の母堂なり。祖母は明年百歲になるにも似ず十九の昔より、信仰せるころより一里

餘へだゝれる赤沼村の三吉神社へ、今尚月に二度宛は必ず徒歩にて參詣すと云ふ。よくもろへる老人なり。

●年六十二に子十五人　本郷區、龍岡町、卅三番地に住む、東京美術學校教諭橋本雅邦畫伯は三十九歳を頭に、十五人の子を持ち、本年六十二歳になれりといふ。めづらしきはなしなり。

●貞烈長女　土佐の國幡田郡宿毛村に長尾安治とてことし五十二になれる人あり、さきにあやまちて太股を火傷したりしかど、くさぐに手をつくせども癒えず。その傷の皮となるべき働きを失ひたれど、如何ともせんすべなくて、今は親族のものともはかりて、妻なる長女とてことし五十三なるが、たすけそひて、わざく高知市までつれ來りて、高知病院にて、野並院長にみせて、治療を乞ひしに、院長いはく、これははやく治療すべき時をおくらかしつれど、到底全快は覺束なし、たゞ他の人の生肉を取りてこゝに、補はゞなはることもあるべけれど、それとても安きわざにあらず。されど全治はうけ合ひがたしといふに、妻なる長女はいたし心をくるしめて憂ふるさまなりしが、やがて面をあげて、いふやう、他の人の生肉をとりて、補はゞなほらんといふことならど、それを得んはいと安きことなり。わが肉をきりとりても必ずなほしてよといふに、院長もさすがに意外におどろき、かゝることは口にこそいへ出來まじきことなれど思ひとまりねと、ねもごろに、說きさとしゝかども、其決心うごかすべくも見えざりしかど、今はと決心して、其貞烈にかまけて、去る七日の日、首尾よく手術を施しゝが、成蹟もいとよろしく、その後の經過もよけれど、安次が傷も遠からずして平癒するに至るべしといふ、めでたき貞烈の婦人もあれどあるなり。こをきゝたまふかたよ如何にかは覺す、

●これまたならびて、いとありがたき貞婦なりといふ

べし。東京本所外手町の八十九番地に住みて、根來新平が妻なつ女といふ婦なり。夫新平との中に今年五ツになれる龜之助といふがあり。さるに夫は陸軍豫備一等卒なりしかど、さきに日清のいくさおこりて歩兵第三聯隊第十一中隊に加はりて、廣島におもむけり。妻はもとより富りとにはあらぬ家政をかにかくに心をつけつゝ手内職などして、辛くも今日をすぐしけり。女のかよわき腕なれど龜之助をはぐゝみながら細きけぶりを立てゝ夫が凱旋の日を待ちたりしが、夫は廣島にてふと急病にかゝりて遂にはかなくなりぬ。されどかなしむことかぎりなく、何事も手につかねど、ますますまづしくなりて、母子やせ衰るばかりなるを、近隣の人々も見かねて、他に再縁をすゝむるものもありしが、固くいなみて、うけひかず、益々品行をつゝしみ、精を出して立働きつゝ一子龜之助を守立てながら、必死となりて、はげみ居れりときゝぬ。人の心うすきにうつりゆくなかに、このなつ女が如きは婦人のかゞみなり。人は心が第一なり、いかにかはかたちうるはしかりとも、如何に學問に達したりとも、又藝能にすぐれたりとも、心よこしまにして、行みだりならば、何にかはせん。女はことにしかり。しもざまのいやしきをみては、わが身をかへりみ、かゝるめでたきためしをきゝては、わが心をみがくべし。昨年くれのころ、このなつ女がこと隊中にきこえしかど、將校をはじめて、其他の人々まで、その家にいきて金など贈りて、その奇特の行を賞せりといふ。

●うわさ　このごろほのかに聞けど、やそ教信者の女學生、名は今思ひ出づべし。神戸東京などにて、やそ學校の助教師などする身にてありながら、おなじ信者の某と道ならぬことをして、果ては身を井に投じたるを辛く人にすくはれたりときゝぬ。不埒ものゝ末は如件。

●貴女の栞　國分操子のものせるなりといふ。かむらせて、日用寶鑑といへるが、その名にそむかずとやいはん。すべてのこと、何くれとあつめものしたる心しらひのほどしられたり。まづたよりよきものなるべし。よしあしは見ん人の心々にまかせん。（大倉書店發行）

●我國の辭書　（小中村博士述）　（つゞき）

さてこゝに一言すべき事あり、其は我か國の言詞の沿革書にして、奈良の朝以前の古言、今の京以來歌文に用ふる詞、其後漢語を交へたる鎌倉足利の世の通行言、轉じて徳川時代より遂ひに今日に及へる平常言までの轉變沿革を考へ、其時代々々の上流下流の人によりての變りめ、諸國の俚語のさまぐゝなりけるを尋ねて、完全なる書有らむ語學文法上はさらなり、歷史學までへ係りたる、學者の稗益最も多かるべしと思はる、但しこれは大事業なれど、熱心の有力者たりと雖も、漸を追ひて成功を期すべしと思はるゝなり。

又一事の願はしき事あり、其は本居春庭翁の言に、今の世のなべての人のものいひ、鄙言にも、詞の遣ひざま、てにをはなど、おのづから其定りありて、ひとつも違ふ事なく、詞意いかにとも知らぬ人も、其云ひざま、てにをはの定り、おのづからよく辨へたれど、言をいひ分つに、いさゝかも誤り違ふ事なし、と詞の通路に記されたるにより、そを言立る人もあれど、いまだ此平常の語格、語調の事を考へて、書にいひ著はせる人なし、そは今の人の平常語に訛りあるを辨し、諸國の方言をもよく探り知りての上ならでは、なし難く、是はた容易ならざる故にもあるべし、されど國語といへる學科の名稱に對しては、古來よりの語學文典の研究のみならず、今の平常語とても、よく其種類を整理し、音調語調を分別して、一部の書となさむ、外國人にも甚便利を與ふべし、まして今後、東洋語學の、歲月に盛ならん氣運に向ふべきにより、或ひは外國の學者に先鞭を着けられんも計り難しと思はる、但しこれ等の學につきては、近日上田氏を始め、熱心の學者も次で起るべき狀なれど、强ひて喋々を要せざらんも、老婆心の止み難きまゝ、筆の序にいさゝか贅言するなり。

さて思はずも言長くなりにたり、これはたゞ一夕の談話に代へたるものなれど、後日言語史を作らん人の參考ともならむいと幸にこそ。　（をはり）

教の庭

一月五日　兼題新年雪

（天地人の外かほ原稿到着順なり）

天　松山市本町五丁目　重松たか子

あらたまのとしたつけさのはつみ雪
　きよきを愛づるはしめなりけり

地　三河國寶飯郡下地村　永井さい子

豊としの志るしはかねてあらたまの
　としたつけさのゆきにこそ志れ

人　神田區三崎町一丁目一番地　小笠原きぬ子

千とせへんため志にひける門まつに
　かゝるもうれし今朝のはつゆき

このあさにふるしら雪のつもりつゝ
　ゆたけきとしとしられぬるかな　白井きう子

しつかにもふる白ゆきのつもりつゝ
　ことしもまたやゆたけかるらん　遠山峯子

あらたまの年立ちかへるかどまつに
　けさめづらしくふれるはつゆき　西村登羅子

家ごとに立てるみどりのまつの上に
　千とせなみせてふれるはつゆき　濱口信子

あら玉のとしゆたかなるしるしとて
　みはたにかゝる今朝のしらゆき　成田延子

あら玉のとし立ちかへるかどまつに
　ちりしましへずつもるしらゆき　水島眞子

あらたなるこゝろも見にぬ愛らしく
　今日ふりそめしにはのしらゆき　木村継子

年きぬるしるしに立てるかどまつに
　ゆきのしらゆふたれかかけけん　松原常子

あらたまのとしの始めにふるゆきは
　ゆたけきあきのしるしなるらん　中島房子

あらたまの年のはしめにふるゆきは
　ゆたけきみよのしるしなりけり　柳精子

白ゆきのつもらぬやまもなかりけり
　いつこを越ねてとしのきぬらん　浦島艶子

あらたまの年のあしたにしらゆきの
　ふるやゆたけきしるしなるらん　野田千代子

門まつにはながさ見ねてふるゆきは
　ゆたけきとしのしるしなるらん　荒井清子

たつとしのあしたにみればわが門の
　まつにもしろくはつゆきのふる　芝田源子

あらたまの年のはしめにゆき降りて
　まつかざりなしうつめけるかな　内田たけ子

あたらしき年のはしめに降りつみて
ちりもなきよと見するしらゆき　内田はる子

門まつのねたもたわゝにふるゆきを
みつゝことしのおきやいのらむ　礒部つや子

ほの／＼とあくる今年のはしめより
みよをほきてやゆきのはなさく　土岐米子

ふりつもりふりつもるとてあら玉の
としのはしめのゆきなこそみれ　南大路正子

ふる雪は去年のけしきにかはられと
こゝろからとてのとけかりけり　南大路芳枝子

あら玉のとしのゆたかなあめつちも
しりてやけさはゆきそふりける　碓井武子

ゆたかなる年のはしめと降りにけん
みやこおほ路の今朝のはつゆき　住山幾子

さほひめの袖ふるやまもすそ野にも
としあたらしきゆきはふりけり　住山靜子

たちかへるとしもゆたかとふる雪に
御代をことほくもろひとのこゑ　羽田三緒子

あらたまるとしもゆたけき君か代と
野にもやまにもつもるしらゆき　河田いし子

あら玉のとしもゆたかにふるゆきは
つもるつき日のはしめなりけり　小町谷里江子

あらたまの年のはしめにゆたかなる
しるしをみせて降れるしらゆき　河野多加子

かさ松のねたおもけにもしらゆきの
ふりつむさまのいさゝゆかしき　村山靜子

あらたまの年のはしめのかせもなき
しつけきそらにしらゆきのふる　菊池須嘉子

ふる雪にうきよのちりもしつまりて
ゆたかに見ゆるみよのはつはる　花山保江子

あらたまの年のはしめになさめこか
はれつくそてにかゝるしらゆき　遠山たゞ子

よろこひのかづつもれとかあら玉の
としのはしめにふれるしらゆき　遠山よしね子

野にやまにふりつむけさのしら雪は
としのはしめのいはひなるらん　平澤ふさ子

としたてはまたはつ雪のこゝちせり
こそ見しいろはかはらされとも　河野文子

立ちかへる年のみそらのゆきみれは
さなからはなのこゝちこそすれ　佐々有鄰子

春めきてさむけくもなしあらたまの
としたちかへるにはのしらゆき　山本きよ子

去年今年なにをへたてゝつもりけん
けさあらたまのにはのしらゆき　岩城まつ子

ゆたかなる年のしるしのしらゆきを
わかかさまつのうへに見るかな　師岡千代子

これぞこの年のはつゆきゆたかなる
しるしはみねつかさまつの上に　三笠嘉子

みよをなほ白うなれとやあらたまの
としのはしめにはつゆきのふる　佐藤さし子

梅かかにそみなんものとふりにけり　としたつけさのしらゆきのはな　大堀梢子

あらたまの年のはしめにふるゆきは　いろあたらしきこゝちこそすれ　丸山須磨子

あらたまのとしたつけさの嬉しきに　いろあたらしく見ゆるしらゆき　鈴木美恵子

新としのけふのほかひのあさとてに　いろあたらしくつもるゆきかな　牧野幸子

としたちてまつそうれしきこむ秋の　みのりもしろきゆきのふれゝは　進藤元子

たてわたす門のまつかえいちしろく　あをみわたりてゆきふりにけり　武田粲子

けさみれはきのふの野へも色かへて　木々のしらゆきはなかとそみる　卜藏莪江子

はるの野にかをれる梅をたつぬれは　みはしろたへにあわゆきそふる　卜藏登洋代子

夜もすからのきはにさえし風たえて　あくるくもまにゆきそふりつる　藤林ます子

立ちならふかと松たけにふりつもる　みゆきやみ代のはしめなるらん　小野田登宇子

あら玉のとしたつけさのしらゆきは　ゆたかなる世のはしめなるらん　小野田のふ子

あらたまのとしたつけさはふる雪に　かせのおとさへうつもれにけり　松尾萱子

かとの松けさゆきしろしあらたまの　としもゆたかに立ちかへるらん　太田貞子

かと松のこすゑにつもるしらゆきは　ゆたけきみよのしるしなりけり　眞鍋直子

年たちてさけふりつもるしらゆきは　はるまでのこれやまをつくらん　中川濱江子

人みなのとしのはしめのゆきかひに　けかすもをしきにはのしらゆき　久松勢伊子

としたてとひもさく花ゝなきものと　おもへはにはにつもるしらゆき　野中あさ子

あたらしき年のひかりと見るまでに　ふりつもりたるけふのゆきかな　矢野うめ子

けふもまたはれやつかんと松の戸を　押しあけ見れはふれるしらゆき　日下かれ子

とよ年のしるしとつもるしらゆきは　としのはしめのひかりなりけり　中野八重子

ゆたかなる年とこそ見ゆくさも木も　ゆきにたはむれあそふすかたに　土肥仙子

この秋のみのりゆたけきしるしとや　としのはしめにふれるしらゆき　平山ふさ子

ひきはへししめかと見えてかと松に　かろくかゝれるけさのしらゆき　三浦さき子

君か代のとよとしみせてあたらしき　としのはしめにあわゆきそふる　梅原華子

このとしゝ又ゆたかなるしるしとや　いはふかたへにしらゆきのふる　佐藤誠子

あら玉のとしのはしめはふるゆきも　またあたらしきいろに見ゐつゝ　名取正代子

立かはるとしのあしたにゆきみれは　そらもこゝろもあらたまりけり　青木桃枝子

かさ松にふりつもりたるしらゆきは　ちとせのはなとひとやみるらん　新開みちな子

あたらしき年のあしたのうめか枝に　ゆきははなかと見ゐまかふかな　大谷友子

あらたまの年たつけさのことけさに　こゝろしつかにゆきやふるらむ　荒瀬布佐子

豊かなる御代のしるしとあらたまの　としのはしめにふれるしらゆき　青木眷子

とよとしのしるしの雪のけさふりぬ　あまつそらにも御代いはふらし　中村のふ子

とよとしのしるしなりけり立かへる　としのはしめにふれるしらゆき　楢瀬さめ子

ふりつもる雪なめてつゝあらたまの　としのほきさけくむうれしき　琴陵瑞枝子

なさめこかつくはねよりもかさ松に　まつかゝりたるけさのゆきかな　琴陵八千代子

この年もゆたかなるらしとよとしの　しるしとふれるゆきのしつけさ　望月ひさ子

老の木もゆきもてはなたさかせつゝ　けふのはつひないはふうれしさ　望月靜子

あらたまの年のはしめなことほきて　望月さい子

あらたまのとしのはしめにふる雪は　よのちりかくすけさのしらゆき　北村孝子

家ことのかとまつしろくなりにけり　ゆたかなるよのしるしなるらん　北村貞子

冬のうちに年たちぬれはうめか枝に　としのはしめにゆきの降れゝは　薬師寺雪子

豊かなるとしのしるしとかとまつに　ほこりかに咲くむつのはなかな　降田愼子

あら玉のとしたちかへるけふなれは　ふりてつもれるけさのしらゆき　堀谷よしゐ子

あらたまの年のはしめはふるゆきに　ゆきはひさしほひかりまされり　堀谷よし子

にひとしのけさふる雪にしられけり　はなきさともはなをみるかな　堀谷やな子

ゆたかなる年のはしめのしるしにや　あきのみのりのゆたけかりさは　山崎すゑ子

さなきたにのとかなりける新たまの　かせもちらさぬかとまつのゆき　林久子

あら玉のとしのはしめにふるゆきは　としのはしめのゆきのあけほの　廣田さめ子

よのちりなはらひ淸めてしらゆきの　なほいさきよきこゝちこそすれ　山木はる子

あら玉のとしのはしめにふるゆきは　としのはしめにつもるのとけさ　靜間密子

ゆたけきあきなかれてみすらん

花ならばうれしからまし立ちかへる　としのはじめのまつが枝のゆき　大谷津琴子

ことしのためしにつもるしら雪に　にほふはつ日のかげののどけさ　徳永萬游子

あら玉のとしのはじめにふるゆきは　はつはなよりもめづらしきかな　畠山千代子

一月五日　兼題　新年祝詞

天　播磨龍野　眞鍋　直子

年の初の日影いとうらゝかにさしのぼれる物ごとにみなあたらしくればえてしめひきはへ松竹立てわたしたるかどに日のみはたなびきわひて年のはじめをことほぐさまも今年はことにみ軍もめでたくをさまりてみ國の光四方にかゞやき渡れる年のはじめなれどにぎはしさもいさましさも一しほまさりて大君の千代萬代をことほく聲々の聞えぬくまもなきもげにことわりなりかしかゝる大御代に生れあひてかゝるめでたき年を迎ふることのうれしともうれしうてなん

地　播磨龍野　田津木久子

年立かへりぬれど一夜のほどに物みなあらたまりて初日の御影花やかにさしのぼりたるさながら神代の心地のせられてなん都もひなもかはりなく高ききはゝいふもさらにて下の下にいたるまでかど毎に松竹立てなへ日のみはたかゝげつらねて歯がためのもちひ屠蘇などいはひつゝ君が代の千年をことほくもげにかゝる御大代のみ恵にこそ

人　山梨縣甲府市山田町　名取正代子

新玉のとしたちかへる今朝は都もひなもれしなべてたかきいやしきけぢめなく豐御酒を神にさゝげつゝ君が代を千代とうたひ八千代とことほくぞいともかしこかりけるまことや一夜のほどに人の心もあらたまり軒端ににほふ初日影門に立ならぶ旭の御旗はさらなり門のかざりの松竹の色も一きは御稜威の光にかゞやきわたりてにぎ〳〵しうさては心なき雀のさへづるさへ千代〳〵と聞ゆるも實に〳〵さかゆく御代のありさまとうれしくもほぎたてまつるになんあなかしこや

碓井　信子

なみもしづけき四方の海をさまるみ代のみさかりは　いく千萬もうごきなき富士の高ねをあふぎつゝみ代の光りに　相生の松に鶴な千代かけてこゑも千代田とまふ鶴のさひかふ　さまのさがにもむかふる年の日出度よいざ諸共にけふの日をことほきあげていはひませあなかぎりなくいはひませ

あたらしき年のはじめのけふの日を

くむわかみつに千代も見ぬけり

村山　靜子

明治の廿八年は夢と過ぎ今日は廿九年の一月一日とこそはなりげれけさは心からして天も晴れ渡り風なさまりて波も靜にとみに陽氣を發ゆ鶯鳥も大御世を祝ひてか聲面白く門松のほとりになき庭の梅ヶ枝はつぼみ三つ四つゑみを傾け山のはを出つる日かけののどけさげに一年の内今日ほどたのしき日はあらずかしやがて家人だちと禮儀のうちにくすりの御酒をいただき　とふにないはひなどするまもあらず新年の禮にきます人三人四人來ては心安き人すらいと　いかめしくきかざりて扇ご手にし玉ふもをかし妾も學びの友どち　の内をそれ／＼音なひくれ方我やへはかへり來れり

河野多加子

四方の海波靜に風は枝をならさず家々常盤の松を立て日の丸の旗をあげ七五三のかざりも何となくゆかしく見ゆ黃鳥のさへづる聲もいとたへに庭の梅か枝にはまばらに花開き初日いとゞうらゝかに立のぼるうれしき家人ますく／＼いやさかゆにさかゆてめでたき年をむかへめでたしともめでたし

四方のうみ波も靜けき大御世を
　なほはかためのもち祝ふかな

佐々木鄰子

内日刺朝廷のあやにかしこき四方拜は妾のいやしき身に伺ひ奉るべうもなけれど　いといと神々しき御式なるべし年立かへる今日といしいへば氏の大神に詣ては大君の千代の榮を祝ひ奉り學校に昇りては教師の前に整列してかはらぬ君が代をくりかへし唱ひかへり來りては父母の年の祝言をなさり／＼に神酒の土器くみかはし兄弟姉妹中かきのへだてなく福壽海無量とうたひかはすも新年の祝言にこそ

太田　眞子

あらたまの年立ちかへりぬれば一夜のほどに眞のけはひ打ちかはりて明らかに治まるといふ御代もはたちあまり九がへりの春とぞなれりけるされば　きのふの忙がはしきに引きかへてあさまだきより行きちがふ人のたゝずまひもいとゞのびらかに見渡さるゝを門の小松のみどりこまやかに引く注連のたゆみなく見ゆるも日出たし玉敷の都は云も更なりあやしの賤山がつもくもりなき御代のけふのひかり打ち仰ぎて山松かぜの千とせの春の調べをやあはすらん世を海原の海人がきはみもあさなきの靜けき海にさし昇る日影仰ぎてありとも見ぬ浪の音に擧げき年の初めをや祝ふらむ　朶の田井の賤が身は腹つゝみ打ちにうちかすゆ酒あまた亞れて太平の代をや　歌ふめりどよめき歌ふ歌聲にはゆるぎなき山もやくづるらん風たゝぬ海もやなごるらんまして海にくぬかにつゝの音のみなりし年も名殘りなく暮れ果てゝ勝どきの聲もろともに立ちかへる年の初日や神代のまゝにさいひけん影も今年はここに照りまさるらん心地のせらるゝを　大君の高砂島わたりや如何ならんと遙に思ひやられてなん

もろこしもうてなの島も君か代の
　年の初めやまづいはふらん

北村てい子

あら玉の年のはしめのためしとて家ごとにかざまつしめかざりしてたかきいやしきおしなへてのどけさはるをむかへつゝ　きみかよをよろつよと祝ふこゝろはいかはかり　うれしかるらんつたなきふでにもことのはにもいひつくすへきすへもなし　あゝきみかよはちよやちよまでといのるなりとしのはしめのことほきをこゝにしるしていはふなり

降田 槇子

玉くしげあくる御空に新しき年の光はあらはれてうらうらとのどかにさしのぼる初日のかげ明けく治まる御代を寿きて門毎に松竹立て渡し軒毎に朝日の御旗ひら〳〵とひるがへして久方の天地と共にきはみなき君が御代を祝ふさまげにめでたくもいと尊く行きかふ人々の心もゆたに見ゆ梢に囀る雀の聲もあらたまりて千代〳〵ときこゆるこそなかしけれおのれもかゝるめでたき御代の初春をむかへてうれしさの余りはふつたの拙なき筆もて大御代の千代に八千代に萬代までも濱のまさこのかぎりなくいや榮ゆに榮ゆ行かんことをいはひ奉りてかくなん

明けき初日の光あふぎつゝ
榮行く君が御代祝ふかな

大久保 みち子

年の始めの日影うら〳〵とさし登りてやどてふ宿の日の丸の御旗に御稜威かゞやき白き物うちかづきて絞りの露垂らん許りのかど松に千代の色するなどさり〳〵にかう〳〵しくなんされば都人はいふもさらなり海にすなどる海士に至るまで打興じて已がしし杯とりかはしつ大君が恵の露にあづかるぞげにやすらけく治る御世のしるしになん

一月廿日　兼題鏡

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　福島縣桑打本町　吾妻ちよ子

あさ夕になれて見れどもますかゝみ
うらはつかしきこゝちこそすれ

地　讃岐國那珂郡琴平町　琴陵瑞枝子

よし惡のれもてには似ぬこゝろをも
うつさまほしきますかゝみかな

人　東京本郷區弓町一、七　宇野きよ子

朝ゆふにうつしても見んますかゝみ
こゝろをたねのれのかすがたを

みたれたるすがたもしらし朝な〳〵
むかふかゝみのなきよなりせば　大島愛子

いつまでもくもらぬ影をこゝろにて
ひとのかゝみとなるよしもがな　町田鶴子

ますかゝみ向ふすがたはみゆれども
みえぬこゝろのおくそゆかしき　吉川眞子

磨くべきこゝろをおきてますかゝみ
すがたはかりをなにうつすらん　神田久子

曇りなきこゝろをうつせますかゝみ
すがたはかりをつくろはすして　青木繁子

朝な〳〵むかふかゝみにうつしみて
こゝろもともにまつみがかばや　遠藤梅子

ますかゝみこゝろうつらば如何せん
すがたはかりもはづかしき身を　町田しげ子

ますかゝみこゝろと共にみがゝなん
すがたはかりをうつすものかば　吉川國子

ますかゝみみる度ごとにくもりなき
こゝろもがなとおもほゆるかな　磯部つや子

年ごとにおいのしらがはますかゝみ　住山徽子

見るものうくなりにけるかな

ある夕にむかふかゝみはかはられど
くもるこゝろのはつかしきかな
南大路正子

吾こゝろかゝみとともにさきたてゝ
つねにくもらぬものとなさなん
南大路芳枝子

同じみはくもらぬこゝろうつしてん
身はよるなみのますかゝみにも
安井章子

朝ゆふにむかふかゝみのくもりなき
こゝろをひとのこゝろともかな
佐山静子

かゝみにもむかしの人は見えすして
かはりのみゆくわかすかたかな
釜頭るい子

千代ふけて向ふかゞみにおもひきや
またきにおいのかけを見んとは
吉田すき子

ならへかしおのかこゝろも曇りなき
すかたみんとてむかふかゝみに
羽田三緒子

千はやふる神のみすかたうつしてし
かゝみはくにのたからなりけり
河田いし子

曇りなき御世のためしのますがゝみ
あかぎこゝろをうつしてしかな
小町谷異江子

見る度にいさゝかなしさますかゝみ
はゝのかたみのものとおもへは
河野たか子

ますかゝみうつせはうつる我すかた
なとてこゝろのうつらさるらん
村山しつ子

五十鈴川かみ代のかゝみかけとゝめて
千代もく曇らぬくにの御まもり
菊地すゑ子

かたちのみ寫すかゝみとおもひしに
こゝろのおくも見えにけるかな
花山保江子

朝なゆふな向ふかゝみにうつるこそ
いつはりならぬこゝろともかな
花山操子

いつのまにかくは老いけん朝ことに
むかふかゝみにかけをうつして
遠山たゝ子

よき顔もあしきもうつるかゞみこそ
おのかこゝろのをしへなりけれ
遠山よしえ子

かけみてはこゝろつくろふ者なれは
かゝみぞひとのだからなりける
平澤ふさ子

めに見えぬこゝろもうつる心地して
さやけきかけのますかゝみがな
河野文子

神代よりかみのこゝろをさながらに
うつしてみするますかゝみかな
佐々有鄰子

こゝろまてかゝみに影のうつりなは
世にうとましきひとはおほけん
山本きよ子

なり〱に寫すかゝみのすかたにも
こゝろのみえてはつかしきかな
岩城まつ子

すかたのみ映すをやいはん世の中の
見きくものみなかゝみなりけり
師岡千代子

あさなあさな向ふかゝみの曇りなく
みかけよこゝろすかたのみかは
三笠嘉子

くもりなきかゝみの面になそらへて
ひともかくこそあらまほしけれ
佐藤さし子

くもりなきかゝみのおもの影よりも
植木綱子

きよきこゝろをうつしてかな

くもりなきかゝみに向ひみるこゝに
おのかこゝろもうつりけるかな　　大堀楢子

村きものこゝろのうつろものならは
むかふかゝみのくろしからまし　　丸山須磨子

肝むかふこゝろみかゝはおのつから
見よきすかたのうつらまし物を　　鈴木美惠子

みたからの何はあれともみかゝみそ
たからのうちのたからなりける　　牧野幸子

大かみのさつけたまひしみかゝみは
くもらさりけりときはかきはに　　進藤元子

あさなゆふなむかふかゝみの曇なき
まことをひごのこころともかな　　武田榮子

うらにすむ鶴をちとせのともかゝみ
ともにかはらぬすかたともかな　　永井まい子

みめよりもこゝろを照せひめかゝみ
これそおみなのたまとあふかん　　卜藏登喜代子

見る度になほもおもひのますかゝみ
うつりこし世のなけかるゝ身は　　小野山さら子

打ち向ふかゝみしなくはかくはかり
むかしのかけをしたはさらまし　　小野田のふ子

くもりなきかゝみの影をなへてよの
ひとのこゝろにうつしてしかな　　太田眞子

ますかゝみ見る度ことにおもふかな
こゝろをもかくみかきなまはさ　　眞鍋直子

ますかゝみ形ちのみかはこゝろまて
うつらはいかにやさしからまし　　中川淑江子

いつくりてかたちを映すうつはより
ひとのかゝみそたふとかりける　　重松たか子

かまくらの殿のかゝみやいかならむ
いつれもうらにつるはすみけり　　久松せい子

あさなにむかふかゝみにはつるかな
わかよむふみのさたかならぬを　　野中あさ子

村きものこゝろにつれてこのあさけ
うつすかゝみもくもりぬるかな　　土岐米子

よの中にかゝみてふものなかりせは
なとかまことの見はわたるへき　　宮島みか子

あさ夕にむかふかゝみをみかきつゝ
きよきこゝろをうつしてしかな　　土肥仙子

わきも子か顔つくりするともかゝみ
こゝろうつらはやましからまし　　梅原ふて子

ものゝふのまことは日々に増かゝみ
くもりなきよにあふそうれしき　　井出信子

影みれはこそよりとしのますかゝみ
うつるすかたのにすもあるかな　　佐藤誠子

朝ゆふにときてみかきてくもりなき
ひとをこの世のかゝみともかな　　名取正代子

共にみしことをおもへはますかゝみ
あたにすきゆくつきひかなしも　　青柳百枝子

手に取れは移りかはりのはやさにも　　新開みちを子

いよゝおもひのますかゝみかな

あさ夕にかけやはうつるますかゝみ
、つもれはひさのおいを見すらん　大谷友子

あめはあみ怒れはいかるかけ見れは
こゝろもうつるかゝみなりけり　荒瀬布佐子

直なるもまかれるふしもそのまゝに
うつすかゝみそかゝみなりける　青木春子

こゝろあらは何さ思はむますかゝみ
よろさしはかりすゝむこのみを　中村のふ子

うつりけん母のおもわのしのはれて
かたみのかゝみなつかしきかな　楢瀬さめ子

くもりたるこゝろもうつる物ならは
かゝみのかけやみにくかるらむ　寧陵八千代子

向ひつゝかたちつくろふますかゝみ
おなしくうつせおのかこゝろを　照崎絹子

想ふひさのすかたさめねさ形見さて
みれはおもひのますかゝみかな　照崎うき子

あめつちのあらんかきりは神なから
くもるさきなき八たのみかゝみ　岡やす子

朝ゆふにすかたのみかはこゝろまて
よそほひうつすますかゝみかな　北村孝子

くもりなくいつはりもなく映すこそ
ますみかゝみのこゝろなるらめ　北村貞子

曇りなきむかしなからのかゝみにも
うつるわかみは晴れやらぬかな　薬師寺露子

朝な〱むかふかゝみにむらきもの
こゝろのそこもてらせよやひさ　岸田槇子

朝な夕なむかふかゝみはかはらねさ
われのみいたくさしそふりゆく　大澤千枝子

二十させにまたこゝのさせなます鏡
うつせはうつるすかたはつかし　名和きん子

くもりなき神代なからのやたかゝみ
きみかめくみのひかりなりけり　松原春子

曇りなくさきしかゝみのこゝろもて
世をてらしますきみそかしこき　松原保子

かけのみか人のこゝろのよしあしを
うつすかゝみやだからなるらん　川村きみ子

石こりのかみのたくみはいまの世に
むかしをみするかゝみなりけり　山本糸子

照りわたる神のみまへのますかゝみ
くもらぬかけをこゝろさもかな　池谷さみ子

おのつからむかふ光りにみかゝれて
うれしきものはかゝみなりけり　諸井さら子

ますかゝみ濟きはかみのこゝろにて
くもらぬかけそたふさかりける　館脇ます子

日の本のますみのかゝみうつしきて
かみ代もいまもかはらさりけり　杉浦糸子

影かたちたゝしくうつすますかゝみ
こゝろのそこもうつしてしかな　堀谷よし子

こゝろまて映るさ思へはますかゝみ　堀谷やな子

うちむかふたにはつかしきかな

たらちねのはゝの形みのますかゝみ
みかきかれたるわかこゝろかな　廣田さめ子

朝な夕なおのかすかたをうつしみて
きよきこゝろをますかゝみかな　林　久子

日の本のくにのみいつをますかゝみ
かけてあふくそたふとかりける　山本はる子

限もなくみかきなしたるかゝみこそ
くもらぬみよのすかたなりけれ　靜間密子

ますかゝみ物のすかたはうつせとも
こゝろはなとかうつらさるらん　大谷淳挙子

うつくしくうつせはうつる影みえて
なとかこゝろのうつらさるらん　太久保みち子

打むかふかゝみのかけのおいぬれは
むかしのすかたしのはるるかな　徳永ます子

人こゝろうつろひゆかんすゑの世も
かゝみのかけはくもらさるらん　畠山千代子

朝ことにむかふかゝみはむらきもの
こゝろのくまもうつせとそ思ふ　畠山ゆき子

よしあしの人のすかたをそのまゝに
うつしみするはかゝみなりけり　田中りん子

ますかゝみ手にとりあけて見る每に
おのかこゝろもかかれとそ思ふ　福塲ふく子

ちりたにもくもる限なきますかゝみ
をさまる御代のすがたなりけり　青木喜代子

うつろはぬ影とてもなしますかゝみ
おいもわかきもそのまゝにして　青木辰子

くもりなき國のすかたをさながらに
うつすや八咫のかゝみなるらん　増戸千代子

一月二十日　兼題　梅を見る

天　三田四國町二十二番地　師岡千代子

花さへ實さへその香さへといひけん花橘にもまさりてめでたきは梅にこそありけれ此梅や奈良の朝のむかし大伴の帥卿の筑紫の國にてめでそめられしよりあまねく國々に植ゑられたりそは雪にたへ霜を凌ぎて咲き出でゝ花さへ香さへその實さへまたなすらふべきものなければなりけりかの陸奥のなにがしが大宮人は何といふらんと詠めりしにもあまたこの花のめではやされしは都人のみにあらざることは知られなんさるはこの花櫻海棠のごとく近よりて見れどとりすることなく其の香の氣高うたぐひなければなほ梅の匂ひにぞ古への事も立かへり戀しうしのばるゝと吉田のひじりもいひけんかしはた其の實は流行病の黴菌をさへころしつべきほどの効ありとて暑き折には必ず貯へおかではかなはぬものなりとかきゝぬ阿波禮花のさきかけとめでゝ年の

他のかざりとし文好む木といひて四君子の一とかぞへしなど實にさることならんかし況して北野の大神の愛でましけんをさへおもひまつれどいよゝめでたきはこの梅にこそと咲き初めたる軒端の梅を見つゝかくなん

地

播磨龍野 眞鍋 直子

新たまれる年のはじめとて春ならねども空いとうらゝかに霞渡りたるかと思ふはかりなるのどけさにまどの戸おしあくれどいとなつかしう風のかをれるにふと心づきて見出せは軒近き梅のこゝかしこけしきはみはゝゑみたるにてぞ有けるいつもかくはやう咲きし事なき梅の思ひかけなく年のはしめに咲出てたるいみしううれしくて

新玉の年の初日ののどけさに
　さそはれぬらん梅の匂へる

人

岡山縣岡山市八番町 降田 槙子

日頃まちつけたりしまがきの梅はゝゑみたりと告げ歸る幼兒の聲いと嬉しうてやをら障子ひきあけて出で見れど吹きくる風のなならぬ香に心も心ならずまだ肌寒き風をもいとはで庭にをり立ちて去年植置きたりし梅のあたりに行き見れど春まだ淺きにはやくもほころび初て氣高くも匂ひこぼれたるさまいとめでたくいともうつくしくげに古より萬の花の兄と稱へ君子と呼びてもてはやすもうべなりやなど思ひつゞけ「色よりも香こそあはれとおもほゆれ」と打誦しつゝ去りやらでめでゐたりしがはやくも鶯の谷の戸出でゝ來鳴けよかしと思ひて

我宿の庭のまがきにさき匂ふ
　梅に來なかん鶯もがな

と口ずさみつゝなほしばしたゝずみゐたれどまだ春風の梅が香を吹き送らねばにや鶯の音だにせぬぞ口をしきや

河野 多加子

山窓のもと常々愛づる女鑑を繙きたましひなうば はれ讀み行きて孝女玉野のくだりとなりければ一字一句あはれそはりて思はず 袖を濕らし一葉は全く泪にうるほせり 時しもふき來る風のまに〳〵ゆかしくめでたき香りするに心動きて庭に下り立ち そこ此處足をはこばすれば階のかたすみの梅ヶ枝に二つ三つ莟のゑましげに見ゆ 思はず聲をあげあな〳〵さて走りより見れば端枝はさき出でたるもあり さきかゝるもありてその風情の氣高きげに四君子の名にはぢず いれこれ心に叶ふ枝を見回りつゝやがて一枝を折り母のもとへ急ぎ行き かくとつげ取敢へずかめにさし讀書の友とこそはなしつれ

佐々 有鄰子

足引の山さとには鶯のこゑ霜とゝもに氷りて いまだきこえぬころなるに吹くる風ぬるく音なひて京の空は軒のたるひもやゝとけそめぬ朝日影まばゆく窓にさし入りたきましたる硯の烟もほのかにかをり來ぬるは好文木のあたりなるべしうべな〳〵みつよつふたついろにいでて春しりがほなるもなかしう心もうきたつばかりに中がきよりも雪をあざむきて姿うるはしう 百千鳥の聲まつけしきみゐていと白う咲いでたるもおもしろや

植木　絅子

立歸る年の初つ方生出つる若菜もやあると 野邊の邊近あさりてと有る賤が家の邊りに出ぬ長閑き空に吹くとしもなき風なれど 得ならぬ香を送るは まやいづこ成らん籬に添ひて立てる老木の梅のみきはさながら枯朽ちたらんと思はるゝかなか〳〵に 幾年の風霜を凌ぎて今やおのが春邊と咲出てけん ましろに清き雪の梢まばらにゑみをふくめるさまいとらうたけて見ゐたり名高き庭つくりの 手に育てられあて人の家にもてはやされ樂にたにあたらず 美々しき床の詠めとさるゝもしばしにして盛りを過れば又かへりみる人もなく萎しほめる花の姿に盛者必衰のことわりを現はすに至る それとこれとは同じ花にて同じからず見る人もなき賤が垣根に咲けど色をも香をもしる人ぞしる 常に鶯の來鳴く宿となりてゆかしき音をとめ 時至れば櫻に代をゆづりて散きはいさぎよく夏の初めにはめでたき實を結ぶに至る 其幸と不幸とはいづれにかあるけふゆくりなくも見初し梅の花につけ心にうかぶまゝをかくはなん

太田　貞子

梅こそいと目出たきものなれ 吹くかぜもまだ袖さむき春のあした南の軒端などに匂ひて雪か霜かとまがはるゝよ 實に萬の花の魁といひけむ風情も思ひ知らるゝかし窓のすきまもり來りて よるのまくらにかよふは其の香のめでたきのみか 誰が袖ふれしといひつる言の葉もおもひ出でられてなん先つ日都の友より 南の梢は早や二つ三つなどいひおこせたるこなたもいたう愈かれて いつしかと待ちわびぬつるをやう〳〵此の朝なん一つ二つ綻び初めぬあはれ此の梅や遂に筑紫に流れゆく身の憂きをもよそに清きこゝろを花にちぎりて吹くかぜに春を忘れぬ心をとゞめられ大宮所にかざしてはわが國のと歌はれものゝふの艦にまゝれてはいくさの庭に匂ひし事もありけりまたぬば玉のやみにはかくれぬかをりたぐへ さやかなる月の影にはいよ〳〵匂ふ色をそいま一しほのものにはいひふるしたるまして 高き操は松竹のかはらぬ色に立ちならびつゝ目出度きものゝ例しに引きいでらるゝも 此の花のまさりて賞き故なんめりさるを花のみならず枝さへ幹さへ取〳〵めづらかになかしういやしき籬の 見ゐぬぞいよゝあかぬかぎりにはありけるよなど樣〳〵おもひつゞくるにまたかたなりの 鶯の今はがほに二聲三聲なき出でたるこたびこそとおもひて都の友に斯くなん

梅にこそ後れもしつれ鶯に
　まづとはれぬる山のしたいほ

名取正代子

春たてとなほさゆかへる山風のはげしきに 埋火のもとにのみかいこもりてありしに きのふけふすこしくゆるびてや空のけしきうらゝなるに文机の前の窓おしあくれば さとふき入る風のたよりにいみじうかくはしきにほひせり ふと見わたせばまた消ゐやらぬ雪の中より垣根の梅の南の枝にははや四つ五つ ほころびそめぬあなめでたくも咲きにけるかな實に花といふ花も澤にあれと此梅のことくめでたきはあらし其色の美はしく 其香かくはしきはさらなり またふりつもる雪の中にも折をたがへず操をかへすにほひそめたるうの雄々しさよ かゝるを存なわず

れそとはたかいひけむ　さるにつけてもいたつらにさむしく〳〵とのみいひて埋火にのみよりそひゐたる心の　ほと今さらにはつかしく且は此梅の花に先せられたる、との口惜しやとまたしも心とりなほしておのがわざをばいそしみぬ

河村きみ子

九重の都の空はあらたまれる年とゝもに梅の花も匂ふへくもわか里はかた田舎なれば氷はかたくとまして淋しさまさる冬枯のさきとなりおのづからあはれふかく思ひて夜に入れと　いも寝られすいつしか夜は更たけて身もこほる心地すればわつかにふしとに入り眠りしかいまたいくほともなく夜はあけゝりけさはいつもよりとくおきいて妻戸開き見れはこはいかにとほきかきれも見渡すかきり梢は白たへの花のさきみだれてなにもいふべくもあらぬけしきにおどろきつゝながめゐたりなりからあかれさす朝日の光りとゝもに花は一枝ちり二枝ちり終に残りなくちりうせぬうへ花と見しは花ならで夜半につもりし雪なりけり今は手にもちたるものをおとしし心地してしはしあきれてゐたりしかよく思ひめくらせは今まで花ならぬものを花とながめたるは愚なる心にころまして梅のめでらるゝは　かんばしき匂ひにこそあらめいかで花ならぬ雪に匂ひやはある　たゝ花のみか人も又かくこそあらめ花のかんばせ雪のはたへあるもたゝしく　かんばしき心なくはたれかひとしくめづるものかある　いと心すべきことになん

山木はる子

ことしはいかなる故にかあらむ心の友とせ　る軒端の梅が枝ふくめるものからほゝゑまればまちわびつゝなん一とせの春さる　べき事ありて西の國に下らんとおもひ立ちつるにさすがに折かなりにほへる捨かたくて東風ふかばにほひおこせよといひとし出立て　しにまたの年春の光りみち渡りて長閑にかすむころ打かなりにほひくる梅が香のゆかしく故郷よりかそれかあらぬかむさわがるるまゝにかへり来れば松のとほそのいといたう荒れまさりたるに今を盛りと咲きみちて　かつちる花の追風なまめかしうて實に色香さらなり心の操も世の外の梅と　おぼねてのごけくたふとくなん

大久保みち子

西さす日影の頃やう〳〵友どちの家を辭して川岸をたどりくるに堤の柳めもはる〳〵打けぶりてそこはかとなく霞み渡れる夕景色にあこがれてうつゝともなく行くにえならぬ香の風のまに〳〵薫りくるに竹あめる垣の内にと覓ねしかば床しさにゆくりなく　ものぞくに若やかなる梅の樹を異しけなることもて包みてなんありけ　るがほご〳〵堪へがたさに主に乞ひてこも解き見ればたがはざり　と梅の花の七つ八つ許り咲けるなりけり

田中りん子

浪花津は梅の名所と古歌にも讀れたれ　は尋ねてと思ふほとに人々の話るを聞けは大和國月か瀬こそ梅の名所ときくもうれしくて谷間を渡る谿のこゑをしるへに來て見れは東より吹く　る風も長閑にて南にさす枝もや〳〵開き初たりうらゝかなる春の　けしきに遠近人もつとひ來たる中に風流人の和歌のたにまくなさ　わらひ初たる梅か枝に結ふもありひさこのさゝにほろ〳〵と足もともしどろに　よろめきつゝいとも興有けに詩を吟しなとするもありおのつからけ高き花は梅にこそ有けれ

河野文子

寄山祝

峰たかくたちそひねつゝうごきなき
みよのすがたを見するやま〳〵

野早梅　仝
まつ人もあらぬ野なかのうめのはな
はるのこなたになにゝほふらん

新年松　住山幾子
かさ松に降りそつもれるしらゆきは
ゆたかなる世のしるしなるらん

新年　仝
年もけふあらたまりぬるうれしさを
かはらぬいろのまつに見るかな

梅花先春　彥坂たか子
はるまたて咲き初めにけり梅か香の
にほひめつらしのきのあさかせ

雪中早梅　小町谷里ね子
大かたははるたにはなのまたるゝを
ゆきのふる木のうめは咲きけり

冬里　靜間密子
雪ふかきやまのひまよりたなひきし
けふりそさとのしるへなりける

仝　仝
あさ篠のまとにきぬたのおとたえて
生こまのやまにゆきはふりつゝ

千鳥　齋藤澤子
千代〳〵とさわく河瀬の千とりさへ
きみかさかねをほきてなくなり

述懷　諏訪晴子
つのくにの難波のうらのよしあしも
わかぬわか身はいかにしてまし

連日雪　西村菊子
ふりそめしその日はいつと白ゆきの
消ぬかうへにもなほつもるなり

冬池　楠精子
をしとりのうきねの床はいかならん
こほりつめたりにはのいけみつ

名所千鳥　荒川清子
すみよしのうら風あらくつきさえて
ふけゆくよはに千とりしはなく

連日雪　野田千代子
とよ年のしるしなるらんきのふ今日
をやみもやらてゆきそふりける

寒樹風　松原常子
やま風にもみちもいまはちりはてゝ
ひとりのこれるみねのまつか枝

海邊雪　町田鶴子
すさびにしあらしは先もしつまりて
ゆきにそきゆるうらのとまやは

初雪　大島愛子
窓の戸をあくるあしたにめつらしく
にはのおも白くはつゆきそふる

早梅　岡田波子
ふるゆきに花はそれともわかれとも

かなりそしるきにはのうめか枝

折にふれて

よの常のわさたにかたしいしの上に
ちとせもへなんこゝろなくては　松坂まつ子

仝

鳥たにもれくらは有りぬひさとして
みなうきくもにまかせはつへき　仝

海邊眺望

はてしらぬなみぢの末はくもはれて
ほのかに見ゆるおきのまほかけ　櫻野あさの子

不けん

おもてなばとまれかくまれむら肝の
こゝろのあかなあらへ世のひさ　吉本こがれ子

修學運動の記　松尾尋常小學校女教師　佐々小琴子

熊本縣菊池郡松尾宮原木野の尋常小學校は三學年と四學年生徒を三小學校聯隊混成に組て修學運動をなさんとて明治廿八年十一月八日の午前九時教員の「進め聯隊」の一聲に宮原村の大杉樹下の集合所より隈部氏の長野城趾さして進擊す　妾は女生徒隊を導ておなじ方位に進みぬ道路は秋收時なり　駄馬荷車の往來織がごとく豊年のすがたみねていさにぎはし宮原村と長野村との界を　流るる木野の川原に聯隊を停ていこふ岸の紅楓に日影映りて錦旗もかくやとおもはれぬ

木野川やきしのもみちにひさかたの
あま津日かけはてりかはしつつ

聯隊は龍のごとくうごきて長野城の大城戸をすぎ　倉庫跡をみるに數棟の礎は畦畔に積みて　新開島となる鷹部屋跡には島に水かひし泉とて古井あり此水を輜重隊に命じて　温湯になし聯隊に一椀つゝをあたへて進擊す

湧出つるみづのますますいさぎよき
ますらをすがたうつびぬるかな

かくて城山の坂路を登り數町にして　馬屋趾の廐所にいづ二の丸なるべしなほさかしき坂をのぼれば　本丸の城門にいたる堀も石垣も儼然と殘りて三百年前の形狀　眼のまへにあり聯隊を分て各隊攻擊にかゝる先登をあらそふ實戰をみるがごとし　さつかんの聲一方にきこえて第三分隊の旭旗を城上に押立たり女生徒隊も此の小隊に　ありければ名譽を聯隊に輝かせり糧食隊は飲食事に奔走し各　隊に握飯(持參)の分與をなせり一時休憩す　各隊の教員は歷史を演說す妾も女生徒を整列せしめて

令孃方の本日名擧の先登は後年に忠義の母公となりて　皇國萬民の心柱を岩根につき立てうごきなき　兒孫を産出すべき姿あらはれましていさぎよくござりますさて此城主の隈部氏の祖先は　世にきこえし保元平治の亂に　忠義を盡して大和國の宇野七郎源親治と申人の末葉でござります親治は肥後國に來り菊池氏に　臣屬せられ菊池武房より親治の末流宇野次郎源持直に隈部といふ苗　字をおくられましたと申事でござりますそれより彌益菊池氏を助けて　歷代の勤王家でござります親治より　二十代の孫隈部但馬守源親永と申人まで此の城に在りまして天正年間の太閤秀吉公が九州征討の後に　子孫斷絕致しまして後は狐狸のすみかとなりましたといふ事でござります　保元より天正まで四百年餘武名を天下に轟しましたる　隈部氏の歷代は史乘にくはしく殘りて令孃方も此母ありて此兒ありと　申事もござりますれば學校に欠席なく昇校なされまして　父母の意にさからはず成長して英雄の

基となり限部氏の歴代よりも子孫の繁昌を心がけられんことを祈ります事でござります

猶分隊を喇隊に組み校旗を風にひろがへし 勝時の聲ほがらかに正々堂々として歸路をさしてくりいだしぬ瀧の水の邊より左に折れて限部氏の墳墓ある雲龍山清澤禪寺に詣づ老僧は茶を煎て 生徒隊にすゝむ敬基の限部氏の墓碑を指教ろ教員等の演説は 山松の風とともにかなしくもあはれにもきこえけり石像の門跡も昔時をかたるがごとし 門をいづれば川あり 石橋をわたりて阿佐古村にいづ此村は限部氏の同族阿佐古武眞といふ人諸を築て 能宗といふ人まで六世住し所とて堀築地など殘りて懐古の情をもよほしぬ

いにしへをしのぶ涙にむせびあひて
袖にあまるは松風の

此人等の古歴史をも皆に演よと女生徒 らがそゝのかせども日も夕暮ちかくなり歸路も遠ければ歌の姿を一わたり說て喇隊をくりいだすやや進みて今朝集合せし大杉の下にて生徒隊をとき各々家にかへりぬ

二月兼題

五日
- 歌……早春鶯
- 文……ゆかしきもの

廿日
- 歌……遠山霞
- 文……紀元節

●きこはまるらす

一原稿はすべて、書きざま正しかるべし、文字のみだれたる、住所姓名のもれたるはとらず。

一兼題歌文は、ことに變体がなを用ひず、一字々々分明にしるさるべきこと、又歌一首の上に、上の句の中に二ころの漢字一字を用ひ他はみなかなを用ゐらるべし。

一必半紙を用ひて十六行、二十四字詰なるべきこと。

一毎紙、國郡、町村、番地、姓名等つまびらかにしるさるべきこと。

一五日兼題は前月廿五日二十日のは、その月の十日までに本社にとゞくやう御送りのこと、遲れたるはとらず。

里志色物語

りちく物語

道晃親王著

秋も半過、風ひやゝかに、扇のおき所忘るゝ比、月すみのぼり、千里の外までも、思残す事なく、虫の音をりしりがほなるもあはれに、詠出す折から、あるさうしのほそ殿の方に、うちさゞめき物云聲す。まだねぬ人やあると聞けど、人にはあらで猫二疋いとむつましげにむかひゐて、物語しゐたり。

いとめづらかにおもひて、聞ぞ、わかき猫に白まだらなるねこの云やう、さてもわが君はかりそめに里に出給ひしが、久しくみえ給はざりし、わらはすがたのおとなになり玉へぞ、おのが年のつもりもしられ、面影はずかしくこそおぼゆれ。いづこに出おはしつらむ。めづら敷ことやありし、かたり玉へといへぞ、下つかたには、何をかをかしと御みゝとゞめ玉ふべきふしもあらむ。かくをさまる御世には、人の心も情ふかく、いたらぬ里もすみよしの、まつ程過てかへり侍る、いわけなき時の

事は露ればへ侍らず。か丶るまじらひは、今初たる心ちするに、いづれもの猫君もなまめかしうみやびをかはし玉へれど、所からにやどやまかつにならひたる身の、いかにひなびたらむとつ丶ましけれど、猶此まじらひころせまほしけれ。君の御ひかりに、しく事あらじ。かた／＼の御中にころをかしきふしもたはすらず、御物語せさせ給へと云へど、白猫聞きて、かたらむにはあはれとたばす事もありぬべけれど、よしなき昔物語に夜を更しても、何かせんと云。かくくまなき月を叙て明し給はむは、心なきわざよと、せちにろ丶のかせど、さはながき御心にとまるたかりの心に忘れねど、申侍るぞや。此の上にさむらふ唐猫は三けど聞えし、南のたゞにすむ猫のむすめがためにもはらからぞかし。我あざなはけし媛と云。かの唐君と聞えしは、中にすぐれてろうたしとて、上にぞめされける。のらの蔵人に見えて、子供あまた持たれける。其の中にたと姫と名づけはべりしは、心ざまらう／＼しく、さゝやかにうつくしさ、なべてならぬさまなれど、うへかぎりなくたもはしときめかさせ給ふ。さぶらふ人々もいだきもちて、かしづき給ふ。やごとなき御まへにて明け暮れ御ころもの下、御丁のうちにのみならはしあろぶを見る父母の心ちいとかたじ

けなくうれしくて、此の君はおほやけものにぞかしづきける。やう〳〵おとなみゆくまゝに、うつくしさ此世のものとも見えず。世の覺えさへはなやかなれど、まだきにいとゞけしきはむ方々おほかれど、父母ことのほかに心おごりして、此君にはなべての猫はあはせじ、かたちいみじくとも、少も品くだれるは、みぐるし。公家の猫も花のかたはらのみやまきは、みるにむねいたからむなど、朝夕のこと草也。さるは世の中の猫共およぶもおよばぬも、此姫君に心をかけまどひありくたぐひ多けれど、高間の山の峯の白雲にて、やみぬ。中にも未のたいにすみし君と云は、やむ事なき人のかしづき給猫也。いみじくきよきに、心ざまやさしく侍り、此れと姫の事心にかけてほのめかせど、おのづからおやたちも、聞てよし〳〵、此みし君はかたちきよらなるのみにもあらず、いみじう心かしこくかしよくもたつし鳥のねぐらに心をつくしねのかりどのはゞかりごとはやことの手きゝなり。わがむすめにならべても、けしうはあらじと、心よせにおもひて折をかしき文のへ事などはせさせよなどいひける。又其比よりも太郎と聞えしは上にみやづかへ玉へる人の、いとらうたくならはし玉へる猫也。かほふくらかにあいきやうつきまみなどのことにもうつ

くしうさかりなるぼたんの花の心ちす。むら上すべらぎ、あまたの猫のしなわかたせ給へる中にも、かゝるはあらじ。御前にもめし出、おと姫ともいとよくおもひかはして、はかなきまたゝびのはやしねずみのかよひ路にも伊ざなひ行心ざしをみせける。

何心なくかたみに思ひかはしけるが、いつしかおはけなき心付て、父母目とゝむる事や有けん、わが猫ともにすかし問けれど、いつの比よりとはしらず、今はひたすらほにあらはれ、水もるまじき御中など云に、聞れやの心ちむねつぶれて、くちをし、あな心う思ふやうなるすぐせをころまちしに、いかにてゝらの猫共をこがましくおもふらんと、我がね事もはづかしく、ねたき事かぎりなし。比は八月十五日、月くまなくすみ、夕べの名殘もたゞならねど、うへは今宵も御あそびせさせ給。物の音も月とともにすみのぼり、身にしむむかりおもしろけれど、唐君は耳にもとまらず、かたはらによりふし、思くしてゐたり。かゝる事のさわがれは、男女まだしらねど、よも君月にあくがれ出、おはの戸口より見いるれど、姫もたゞならずかうらんにより臥、ながむるからに、かなしき比とひとりごちて、思ひみだれたるさま、さ

恭賀新年

玉翠館

謹白



艶麗にして光澤を帶び
高尚にして雅致に富む

實に館主が幾多の經驗
熟練を重ねたる賜なり

神田區駿河臺
御茶之水橋

玉翠館

氣賀秋畝

女鑑第百一號目錄

〔明治二十四年八月八日內務省許可〕
〔明治十五年三月十二日遞信省認可〕

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治二十九年一月十九日印刷
同　年一月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所（電話番號一九四六）國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）